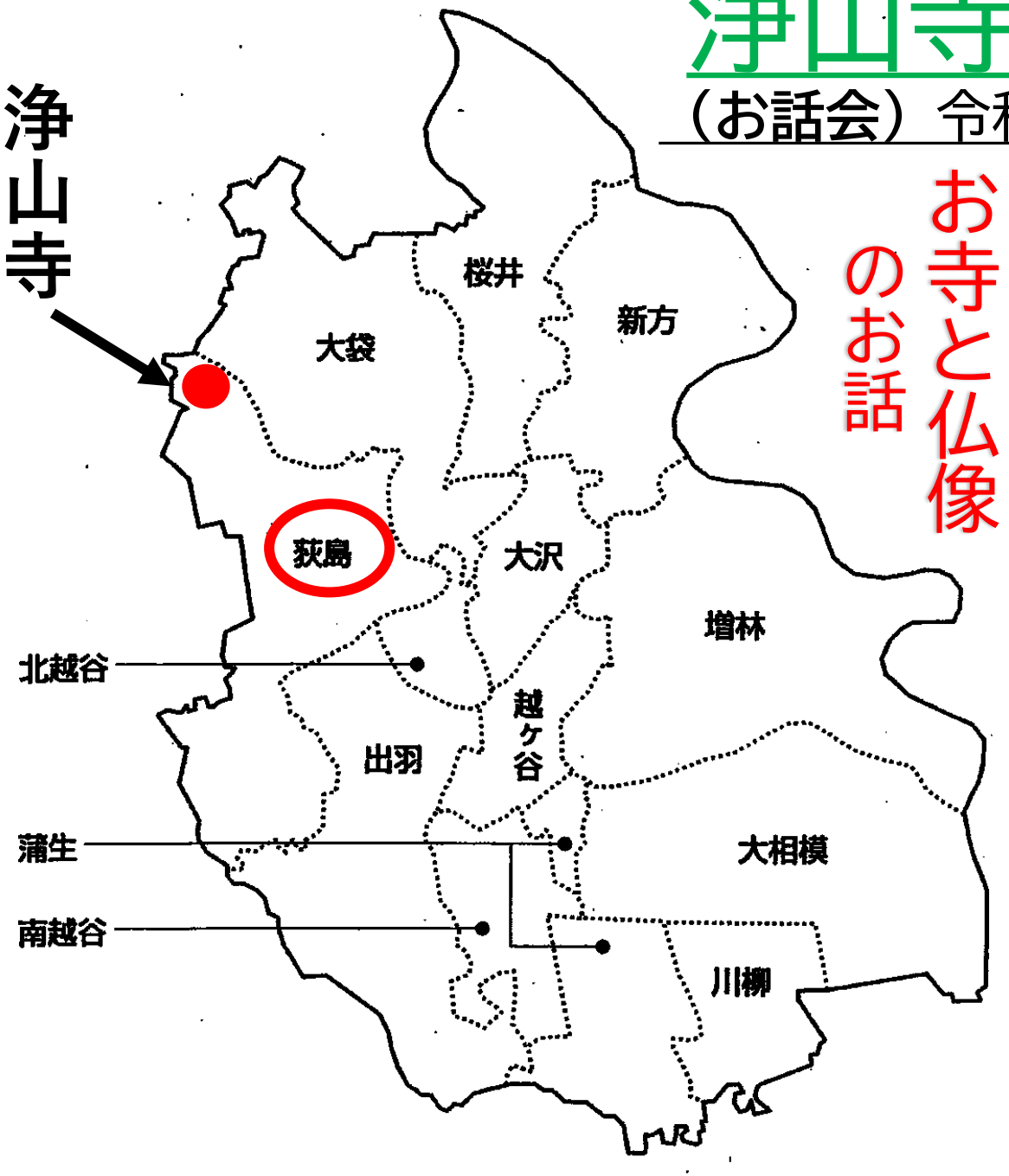
浄山寺 と 木造地蔵菩薩立像

（お話会）令和６年８月２４日（土）、浄山寺・耕雲閣にて

NPO法人 越谷市郷土研究会

（講師）舩岳知康（ふなおか）



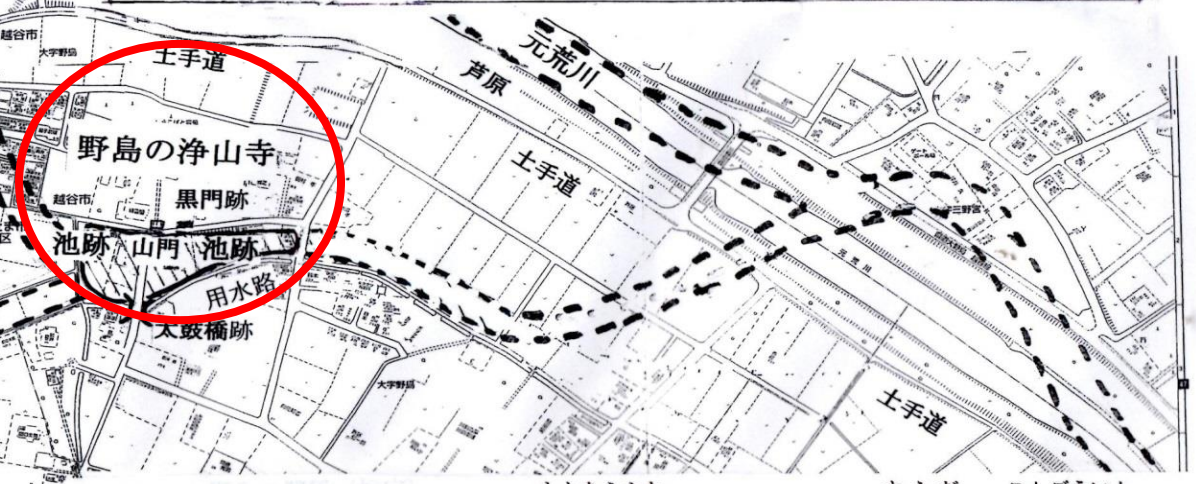
お寺と仏像のお話

◎本堂全体の老朽化が進み、令和２年９月１２日から、大規模な改修工事に入り、**令和３年の秋に本堂の大改修工事が完了**しました。

◎続いて、**令和４年に鐘楼と山門の工事が完了**しました。

◎簡単ではありますが、「**浄山寺 と 木造地蔵菩薩立像**」についてお話させて頂きます。

かつての野島の浄山寺の周辺の川筋



このあたりは、かつて元荒川（もとあらかわ）が乱流し、末田（すえだ）の金剛院（こんごういん）や野島（のじま）の浄山寺（じょうざんじ）は、陸続きではなく、周囲が川で囲まれた中島であった（推定）。

（出典）
①野島の浄山寺周辺のかつての川筋
～野島は川に囲まれた中州だった～
加藤　幸一　氏　著
②「野島浄山寺周辺の地形仮説」は、
全て「秦野秀明氏のオリジナル仮説」です。

（山院寺号）野島山浄山寺、（宗派）曹洞宗

①９世紀のお地蔵さまの発見

◆Ｈ２３年（2011）３月１１日の**東日本大震災のとき、厨子が倒れて仏像の足が折れ**、林 宏一氏（前埼玉県文化財保護審議会委員）が見られて驚かれた。**９世紀にさかのぼる**。

◆Ｈ２７年（2015）３月１５日、**埼玉県有形文化財に指定**

◆**Ｈ２８年（2016）８月１７日、国の重要文化財に指定**

（補足）仏像を含む有形文化財のうちで重要なものは、「重要文化財」として国による指定・選定・登録が行われます。さらに、重要文化財のうちでも特に価値が高い文化財については、「国宝」として指定されることになっています。

文化庁が発表した**2023年7月1日現在のデータ**によると、**仏像を含む「美術工芸品」の「彫刻」に分類される文化財の件数は、重要文化財が2,732件、国宝が140件**（「重要文化財＋国宝」に占める国宝の割合：**5.1%**）となっています。

（出典）仏像の基本「重要文化財」と「国宝」の意味や違いについて．．．

②地獄に落ちた人さえも救う　地蔵菩薩－①

◆東日本大震災で破損した部分を修理する際、背面の襟下にくりぬきが見つかり、その中から慶長５年(1600)に修理した旨を示す札が発見された。袖口や衣服のドレープ（垂らした布の柔らかい流れる様なヒダ）に残る彩色は、この時に施されたものだと思われる。

◆浄山寺の地蔵菩薩立像は秘仏であったため来歴が不明であったが、平成23年（2011）の東日本大震災で両足を損壊、修理に回したところ、衣服のヒダの特徴から９世紀前半（**平安時代前期**）の作であることが判明した。腕から垂れ下がる袖のヒダは強くうねって反りかえり躍動感がある。

（出典）最新版 仏像でめぐる 日本のお寺名鑑、56頁
廣済堂ベストムック411号 廣済堂出版

②地獄に落ちた人さえも救う　地蔵菩薩－②

◆釈迦の入滅後、弥勒菩薩が出現するまでの間、現生に仏が不在になるため、地獄道などの**六道**（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天）**すべての世界に現れ、衆生を救う役目**を負っているとされる。

◆「**地蔵**」という名は「**大地を体内に包蔵する**」という意味で、「大地によって人々に実りや豊かさを与える。さらには、人々の苦しみを肩代わりしても、大地のように揺らぐことがないことを表している」という。
（出典）朝日新聞・夕刊（2023年6月20日）

◆地蔵は、求めに応じて、自由自在にどこにでも現れるべく、親しみやすい比丘（びく、僧）の姿をしている。これは釈迦の修行中の僧形を表している。また、一般的に**右手に錫杖**、**左手に宝珠**を持つ姿は、六道世界を経巡って衆生を救済する行脚の身なりなのである。
（出典）となりの神様仏様、稲垣泰一著、94～95頁

◎野島地蔵尊の信仰と伝承

◆「鎖で繋がれた地蔵尊」　地蔵尊の遊化（ゆけ）を止めようと、住職某 が像の背中に釘を打ち鎖で繋いでしまったが、後の**住僧日岩**（にちがん、１０世、江戸時代）が見るに忍びず取り外した。
（「野島山地蔵尊略縁起」）

◎**浄山寺本尊の延命地蔵は「片目地蔵」と称され**、その伝説が語り継がれている。即ちこの地蔵は毎日寺を抜け出して、村内説法のため巡回していたが、ある時その巡回途中つまづいて転倒、茶の木で目をついて片目は失明。このとき流れ出た血を山門前の沼水で洗ったところ、沼の魚はすべて片目の魚になったという。以来**片目地蔵と称された。**
（出典）越谷風土記、越谷市教育委員会編集・発行

◎江戸時代の浄山寺（出開帳）

◆江戸時代を通じ当寺は霊験あらたかな子育地蔵尊として広く人々の信仰を集めた。ことに**安永７年（1778）には江戸の湯島天神**（湯島天満宮、湯島三丁目）**で出開帳が行われ**、湯島の講中をはじめ江戸の信者による参詣者が群集した。

（出典）越谷ふるさと散歩（上）

◆天明４年（1784）には**千住の慈眼寺**で、天明５年（1785）、寛政６年（1794）、文化１３年（1816）、弘化（こうか）３年（1846）、弘化４年（1847）には**湯島天神**でそれぞれ**出開帳が行われていた**が、いずれも盛況であったという。このほか関東各地の要請にもとづき、例えば**熊谷・深谷・妻沼・桐生・足利・藤岡・不動岡（文化１３年**：1816）、**あるいは比企郡松山・入間郡小久保村・筑波郡上郷**（かみごう）**村・葛飾郡堤根村（文政２年**：1819）など各地を巡回しながら**出開帳を行った**が、地蔵信仰の中心として、**各地からの参詣人が絶えなかった**という。

◎江戸時代の出開帳とその意義について

（出典）**江戸時代**の出開帳と**その意義について － あしあと － gooブログ**

◆「出開帳」の「**開帳**」とは、寺社において普段は参拝できない秘仏を一定期間、帳（とばり）を開いて一般に開放することをいい、「**御開帳**」といった言葉で呼ばれることが多い。そしてその開帳をもともとの寺社ではなく（もとの寺社で行うものは「**居開帳**」［いかいちょう］）、各地、主に大都市に出向いて行うことを「**出開帳**」［でかいちょう］という（「回国開帳（巡行開帳）」ともいう）。
江戸時代には出開帳をふくめ、開帳が盛んであった。出開帳はやはり人口の多い江戸において行われることが多かった。

◆**開帳の意義**はさまざまあるが、まずはなんと言っても信者に結縁（けちえん）の機会を与えることである。また、それと同時に寺社側としては、信者からの奉納品や賽銭などの収益があがるということも否定できない要素である。**純粋な宗教行事として行われていたわけでは必ずしもない**のである。江戸の庶民にとっては出開帳は信仰のためでもある一方で、行楽の対象でもあったようである。開帳される場所の付近には見世物小屋や飲食店などもひしめき合い、大変な賑わいを見せていた様子が当時の浮世絵等にも描かれている。

◎武州崎玉郡野島地蔵尊於湯島天神境内開帳図

（出典）作品詳細 ｜ 武州埼玉郡野島地蔵尊於湯島天神境内開帳図 ...
https://images.dnpartcom.jp/ia/workDetail?id=TRE000718

◆作家名 歌川豊国（三代）=歌川国貞（一代）、歌川国政 分類 絵画_版画 材質・形状 錦絵　所蔵先 東京都江戸東京博物館 画像データ 5.7MB

◎江戸時代の浄山寺（縁日）

◆文化１０年（1813）と文化１４年（1817）に野島地蔵尊を訪れた江戸小日向（こひなた、文京区の町名）の僧侶・釈大浄（津田大浄）は、縁日の有様を次のように述べている。

『十方庵（じっぽうあん）遊歴雑記』

境内は決して狭くはないが、境内には**飴屋・菓子屋・蕎麦屋・団子屋・燗**（かん）**酒屋・人形見世屋・独楽**（こま）**まわし・居合抜の歯みがき売・覗**（のぞき）**からくり・書画の早書・奉納の義太夫語り、栗もちの曲搗**（きょくづき）などが所せましと立ならび、**境内は足の踏み場もないほどの参詣人でうずまっている**、とその賑わいぶりに驚いている。

◎居合抜の歯みがき売

◆松井源水の居合い抜き（東京風俗志より）

（出典）刃を抜く＝歯を抜く？歯磨き売りの見せ物だった居合い抜き…

◎覗（のぞき）からくり

◆「のぞきからくり」とは、のぞき穴のある箱の中にストーリー仕立てにした絵（名所の風景や絵）が何枚も仕掛けられていて、口上（こうじょう）（説明）する人の話に合わせて、その立体的で写実的な絵が入れ替わって行く見世物です。

（出典）覗きからくり｜日本文化いろは事典

◎覗（のぞき）からくり

◆客にレンズ越しに情景を描いた絵を覗かせ、「**からくり節**」ないし「**覗き節**」と称される節回しに乗せて説明を加えながら、紐を操作するなどして絵を次々と差し替えながら見せる見世物

（出典）のぞきからくり - Wikipedia

◎栗もちの曲搗（きょくづき）

◆歌川豊国（三代目）画　文久元年（１８６１）　国立国会図書館所蔵

（出典）江戸食文化紀行-江戸の美味探訪- no.163「栗餅（あわもち）」

◆昭和三十一年二月　花嫁衣裳でお詣り、野島地蔵尊（埼玉新聞２５日付）

花嫁衣裳でお詣り　越谷の野島地蔵尊安産の霊験あらたか

うららかな陽ざしをうけた二十四日昼下り、文金島田の花嫁姿もあでやかなおヨメさんが続々とシウトさんに導かれてお寺にお詣りにやってきた。これは**日本一の大ワニ口で知られている**越谷町荻島地蔵尊の縁日の一コマ、何しろ**子授、安産、子育に霊験あらたか**とあって節分前に結婚式をあげたオヨメさんたちが、再び花嫁衣裳をつけてお詣りにやってきたもの、今年は「さる年」とあって前年いそいで結婚したものが多かったため、この日参詣する花嫁さんの数も多く、境内はさながら金らんどんすの花嫁展覧会の観があった。

（出典）越谷市史　六　史料　四
社会編　七　新聞資料

（補足）申（さる）の日・年は「去る」と通じるので**結婚式を行わない**などとの俗信

③「野島山 地蔵尊 案内」から（１）

◆関東屈指の古刹霊場

野島山に安置してある本尊・延命地蔵尊は、人皇第５６代、清和天皇の**貞観２年（860）**、今より１千百余年前、天台宗の高僧、**慈覚大師**、一刀三礼（さんらい）の御作（ぎょさく）である。

浄山寺は天台宗に属し、慈福寺と称していた。

◆本堂は文久２年（1862）に焼けたあと再建されたものである。
令和３年（2021）秋、老朽化による大改修工事が完了した。

（補足）岩槻の**慈恩寺**（現・岩槻区慈恩寺139）の観世音菩薩像、足立郡里村の**慈林寺**（現・川口市安行慈林954、慈林薬師宝厳院）の薬師如来像と共に一木三体の作といわれる。

（慈林寺の出典）慈林薬師宝厳院 ｜ 川口なびっ！

◎野島の天台宗慈福寺の由来

（出典）越谷風土記、越谷市教育委員会編集・発行

◆伝承によると**嘉祥元年（848年、円仁が５５歳の頃）**、円仁が日光に入り輪王寺（りんのうじ）の三仏堂（本堂）、常行（じょうぎょう）堂、法華堂を造営したとされ天台宗の影響力が高まったと伝えられています。

◆寺伝によると**円仁**が日光に登山して輪王寺（天台宗の門跡寺院）を開基した時、日光山頂より李（すもも）の実を虚空に投げて、この実が落ちて開花した所に一宇の堂を造立することを誓って下山した。
それより**８年後（848＋8＝856年？、円仁が６３歳の頃）**、円仁は**東国巡回の旅**に出たが、武州埼玉郡岩槻郷大沼（慈恩寺沼）の脇を通った時、李（すもも）の花が見事に咲き誇っていた。円仁はこの李（すもも）は８年前、日光山から空中に投げ込んだ李（すもも）の実が成育したものと悟り、心願通りこの地に一寺を建立、本尊には自ら彫刻した**観世音菩薩像**を納めた。これが岩槻の天台宗慈恩寺である。

◆埼玉郡野島を通ると、（中略）一寺を建立、彫刻した**延命地蔵の立像**を本尊として納めた。これが野島の天台宗慈福寺である。

◆足立郡里村（川口市安行慈林）を通ると、（中略）一寺を建立、彫刻した**薬師如来像**を本尊として納めた。これが里村の天台宗慈林寺である。

◆三寺とも慈覚大師の「慈」をとって寺号としている。

◎「円 仁（慈覚大師）」の歩み

円　仁（えんにん）	
７９４年	栃木県（下野国、しもつけ）に生誕
８０８年（１５歳）	比叡山に入る
８３５年（４２歳）	１３年間、唐（618～907年）に渡る
８４８年（５５歳）	◎日光に入り、輪王寺の三仏堂（さんぶつ堂、本堂）、常行堂（じょうぎょう堂）、法華堂を造営 ◎日光山頂より李（すもも）の実を虚空に投げて、この実が落ちて開花した所に一宇の堂を造立することを誓って下山
８５４年（６１歳）	第３代・**天台座主**に就任
８５６年（６３歳）	東国巡回の旅に出た（野島の天台宗慈福寺の建立）
８６４年（７１歳）	入寂

③「野島山 地蔵尊 案内」から（２）

◆**天正１９年（1591）、徳川家康**、越谷辺御放鷹（ほうよう）の時、本尊霊験を聞き召されて御参拝あり。**「この地、霊にして山うつ密とし、浄し**」と上意ありて、寺領300石の御朱印を賜り、**曹洞宗に改め、野島山浄山寺と命ぜらる**。
時の住僧**明山和尚**は、「こは過分なり」と堅く辞して受けなかったので、家康は袖の中より鼻紙を取り出し、献香料として**３石**を賜う由を書いて差し出された。
これを世に**鼻紙御朱印**として、多くの人に知られている所である。

③「改宗と寺名変更」

浄山寺縁起	現状確認
	震龍景春和尚（しんりゅうけいしゅん、慈福寺、曹洞宗の開山）
1591年　徳川家康・御参拝	1591年、**明山和尚**（みょうざん）の時、徳川家康が御参拝
★1591年、徳川家康・御参拝時に天台宗から曹洞宗への改宗と、慈福寺から浄山寺への寺名変更を命ぜられた ★時の住僧：**明山和尚**	★慈福寺から浄山寺への寺名変更を命ぜられた ★明山和尚（曹洞宗の二世）の時、天台宗から曹洞宗へ改宗

◎本堂内の「光明堂」に改宗後の歴代住職の御位牌が安置されている

・承陽大師（じょうよう、道元禅師）……越前の永平寺を開山

・常済大師（じょうさい、仏慈禅師）……大本山総持寺の開山

③「野島山地蔵尊案内」から（３ー①）

◆越谷市指定文化財

①**唐金大鰐口**（からかねおおわにぐち）　（工芸品）

日本一大鰐口

厚さ：**６０ｃｍ**、直径：**１８０ｃｍ**

②徳川家康公　**鼻紙朱印状**　外（ほか）

歴代将軍朱印状・11通（古文書）

（補足）二代秀忠、六代家宣、七代家継、十五代慶喜を除き、
歴代将軍の寺領朱印状が保存されている。

大鰐口

（出典）（右）mimi☆ミのブログ 浄山寺 木造地蔵菩薩立像 埼玉県越谷市

◆天保１２年（１８４１）の**銅製の大鰐口**には、神田紺屋町・本（ほん）小田原町・日本橋青物町・神田豊島町・馬喰町二丁目・江戸橋四日市・芝金杉浜町・大伝馬町・深川冬木町・千住河原町・二郷半領花和田村・竹塚栗原町・粕壁・高野・大門・菖蒲など広範な地域にわたる**鰐口奉納者の名が八十名ほど**刻まれている。

（出典）越谷ふるさと散歩　（上）

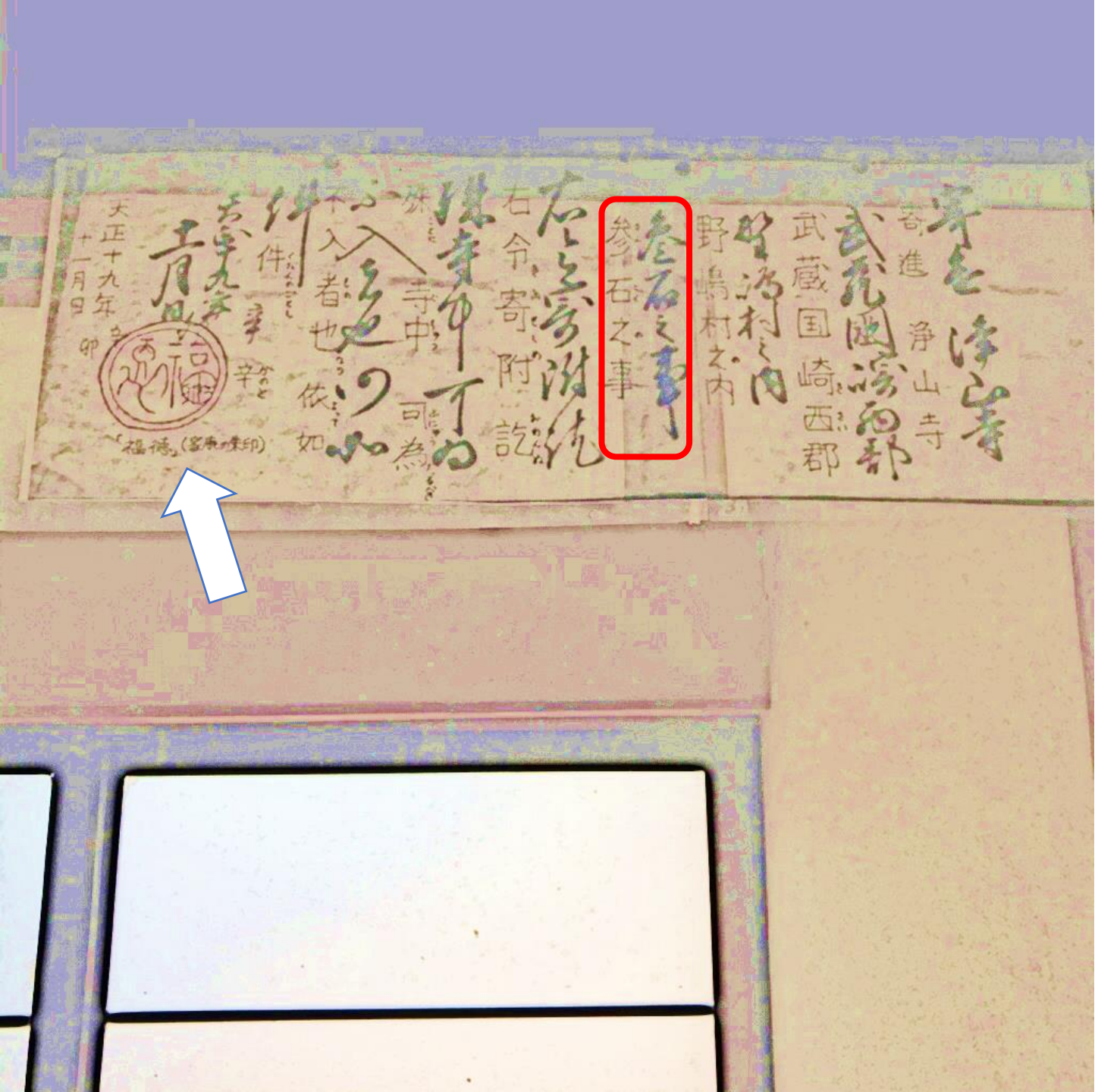
③「野島山地蔵尊案内」から（３ー②）

◆ **「大鰐口」は野外にあった・江戸時代の地図で判明**

越谷市野島の浄山寺にある市指定文化財「野島浄山寺の大鰐口」が江戸時代の1862年（文久２年）に同寺本堂が全焼したのに、無傷で残っていたのは、**当時、境内の屋外に設置されていたためであることがわかった。**越谷市教育委員会の調査でこのほど判明した。

浄山寺の「大鰐口」は現在、本堂内につるされている金属製の鳴り物具。丸く平らで、その中は鰐の口のように空洞になっている。1841年（天保12年）に奉納された。**本堂が全焼した際に大鰐口だけが無傷で残ったことが、長年、謎とされてきた。**

（出典）　「大鰐口」は野外にあった・越谷「浄山寺」江戸時代の地図で ...東武よみうりウエブ版

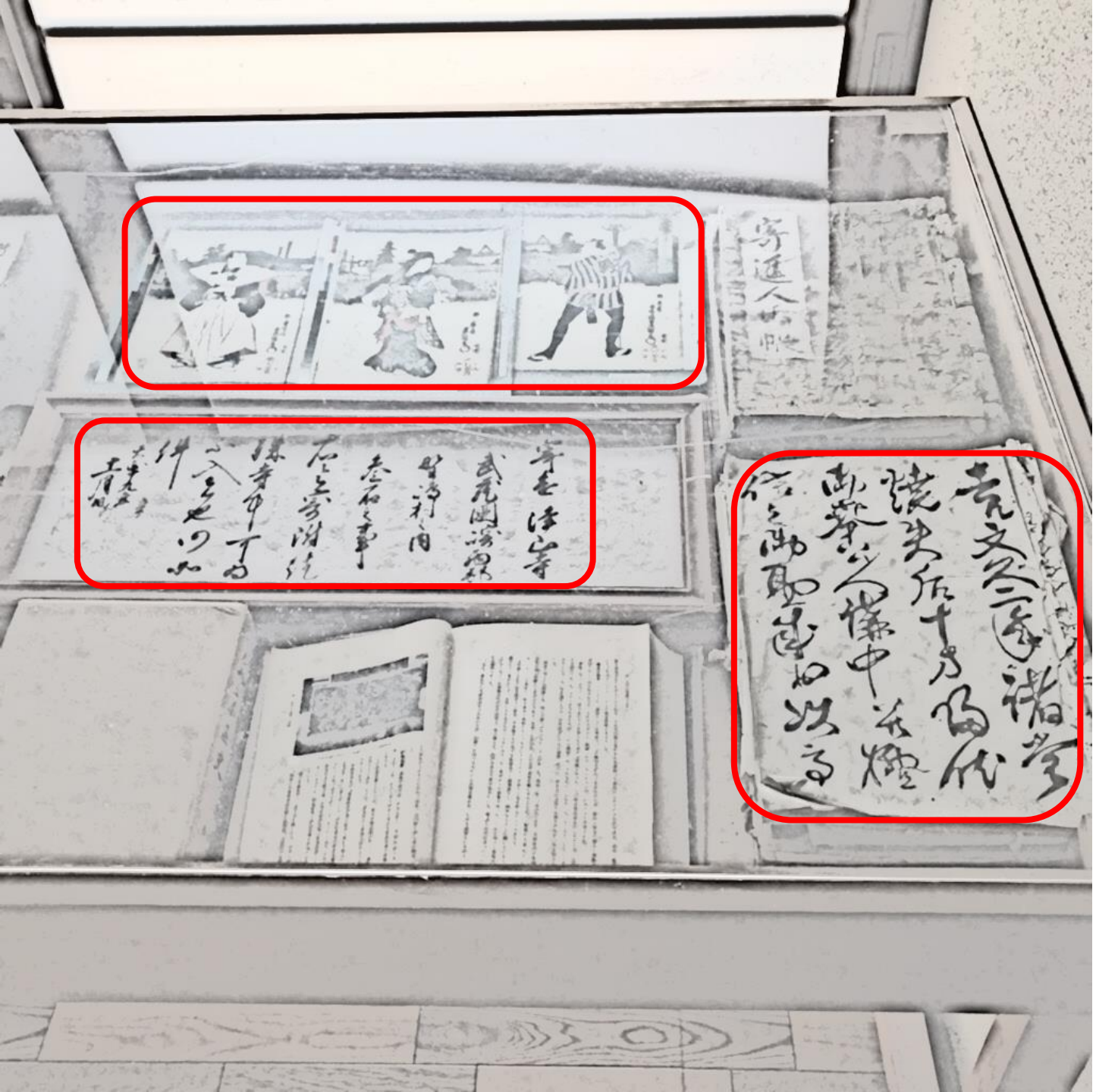


◎ 朱印状

「武蔵國　崎西郡　野嶋村之内　参石之事」

◆家康からのものである「福徳」印が押されている

（出典：左の写真）kawagoe-fujimi.net
http://kawagoefujimi.net/2020/11/kokuhojizo
国宝地蔵菩薩ご開帳で越谷市の浄山寺（野島地蔵尊）へ【2月 ...



◎ 徳川家康から寺領下賜の際の「朱印状」他

- 朱印状（参石之事）
- 湯島天神境内開帳図
- 諸堂焼失（文久２年）

（出典：左の写真）kawagoe-fujimi.net
http://kawagoefujimi.net/2020/11/kokuhojizo
国宝地蔵菩薩ご開帳で越谷市の浄山寺（野島地蔵尊）へ【2月 ...

（出典）スライド27～32は、「平成２８年 越谷市文化財講演会」の資料から（Ｈ２８年８月２１日、講師・林宏一氏による）

◎像の概要

◆左手に宝珠、右手に錫杖をもつ錫杖地蔵。像高92.5ｃｍ、髪際高（はっさい）87.4ｃｍ

◆カヤ材一木造（両手足・足先・足枘（ほぞ）は別材）、内刳（うちぐり）なし。彫眼、彩色（慶長５年／1600年修理）

（補足）『刳：えぐる、くりぬく、さく』の意

図2　同　背面

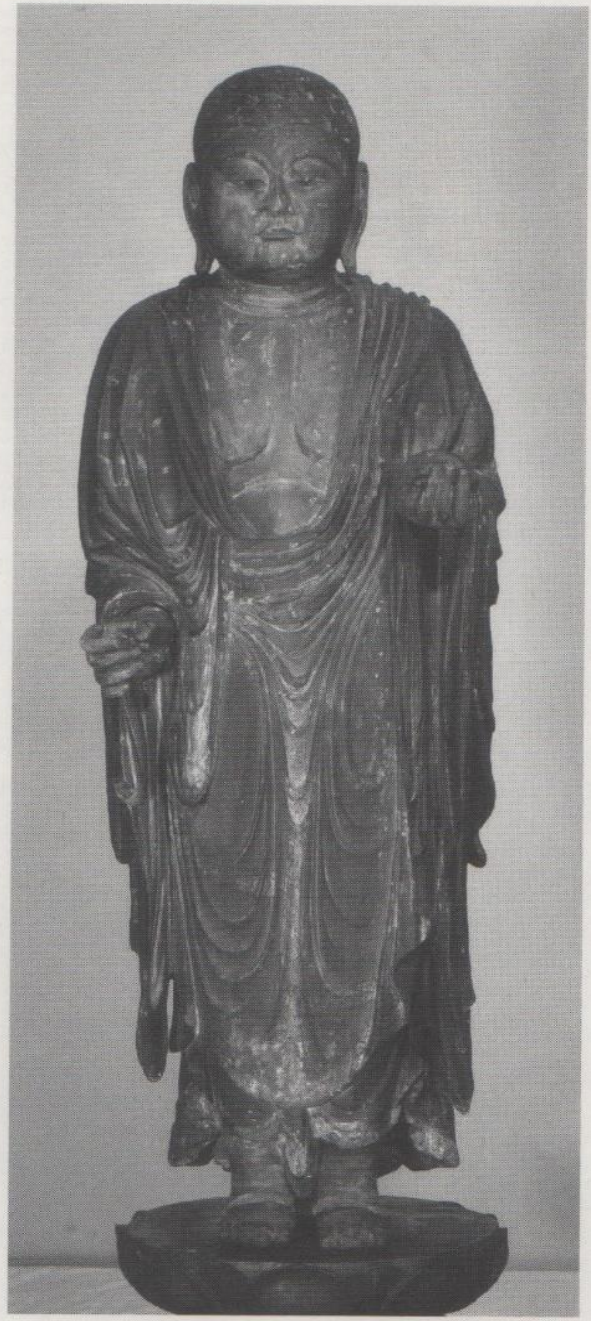


図1　木造地蔵菩薩立像　埼玉・浄山寺

図4　同　右側面

図3　同　左側面

◎造立時期とその背景《様式技法》

◆内刳（うちぐり）のない丸彫りによる一木彫成（いちぼくきざみ）の技法、ズングリとした重厚感ある立体構成、**天平彫刻の余風を伝えて**調子強く端正に彫り付けられた衣文表現、髪際（はっさい）線の特徴ある波形表現等に**平安初期一木彫刻の特色が強く表れており、大らかで健康的な造形は奈良木彫の伝統を覗わせる。**作風の特色から**９世紀にさかのぼり**、縁起に説く貞観２年（860）は一つの目安となる。現在のところ**武蔵最古の木彫仏**といえる。

（補足）710年（和銅３）の平城遷都から794年（延暦１３）の平安遷都までの奈良時代後期八十余年間を美術史では**天平時代**とよび、その時代につくられた彫刻を**天平彫刻**という。奈良時代前期（白鳳時代）。

◎造立時期とその背景

《地蔵信仰と東国天台・法華経》ー①

◆地蔵信仰…奈良・平安初期では、観音、虚空蔵とセットあるいは**薬師・観音・地蔵**とセットが多い。わが国初期の地蔵像は**左手**宝珠、**右手**施無畏印の錫杖を持たない地蔵が先行するが、**東国では、錫杖地蔵の造像例が多い**。

（補足）「施無畏（せむい）」
…仏・菩薩が衆生の恐れの心を取り去って救うこと。

右手
施無畏印

◎造立時期とその背景
《地蔵信仰と東国天台・法華経》―②

◆東国天台の隆盛…**東国における慈覚大師草創縁起・伝説の流布の背景**には、弘仁８年（817）の最澄の東国巡錫（じゅんしゃく）を契機として、**広く同地域に根付いた天台教団の隆盛**があった。

この隆盛の背景には、奈良末から平安初頭にかけて北関東地域で活発な伝法利生活動を展開した南都系僧侶・**道忠**（天平[729～]～延暦[782～805]年間頃、**武蔵国出身**とも伝わる）と天台宗の開祖・**最澄**（[763～822]、近江国の地に生れ）**との交流**を契機として、**初期天台教団における東国出身僧の圧倒的な優位**があったことも見逃せない。

◎造立時期とその背景
《地蔵信仰と東国天台・法華経》ー③

◆東国天台の隆盛…即ち初代天台座主（ざす）・**義真**（ぎしん、相模国）、二代座主・**円澄**（えんちょう、武蔵国埼玉郡）、三代座主・**円仁**（下野国都賀郡）、四代座主・**安恵**（あんえ、下野国）、五代座主・**円珍**、**徳円**（下総国猿島郡）、七代座主・**猷憲**（ゆうけん、下野国塩谷郡）等歴々たる名が挙げられる。
円澄は初め**道忠**の弟子であり、円仁・徳円・安恵は道忠の高弟・**広智**（こうち）の弟子であったことを知るなら、**鑑真**（奈良時代の僧）**に学び「東国の化主**（けしゅ、高徳の僧）**」と尊ばれた道忠の蒔いた種が、そのまま最澄の日本天台宗創立の母胎となった**ことがよく窺えよう。

（補足）**道忠**（735～800年）、奈良時代末期から平安時代初期にかけての律宗の僧侶
…（出典）**伝教大師最澄と道忠教団 柴田聖寛 - 会津天王寺通信 - gooブログ**

◎ 天台座主を輩出

（出典）最澄最後の6年間と東国の道忠教団 -JIKATSU｜創価自主 ...

道忠⇒円澄(えんちょう、**第二代**座主（ざす））

道忠⇒**広智**（こうち）⇒**円仁(えんにん、第三代座主)**

⇒安慧(安恵、あんえ、**第四代**座主)

道忠⇒**広智**⇒徳円（とくえん）⇒円珍(えんちん、**第五代**座主)

⇒惟首(ゆいしゅ、**第六代**座主)

⇒猷憲(ゆうけん、**第七代**座主)

（南都六宗）
◇**律宗**、鑑真、唐招提寺
◇**華厳宗**、**良弁**（ろうべん）、東大寺

（補足）**道忠**は律宗の僧侶。**律宗**は、戒律の研究と実践を行う仏教の一宗派である。日本には鑑真（がんじん）が伝来させ、**南都六宗**（奈良仏教ともいう）の日本仏教の一つとなった。

◎ 円 仁

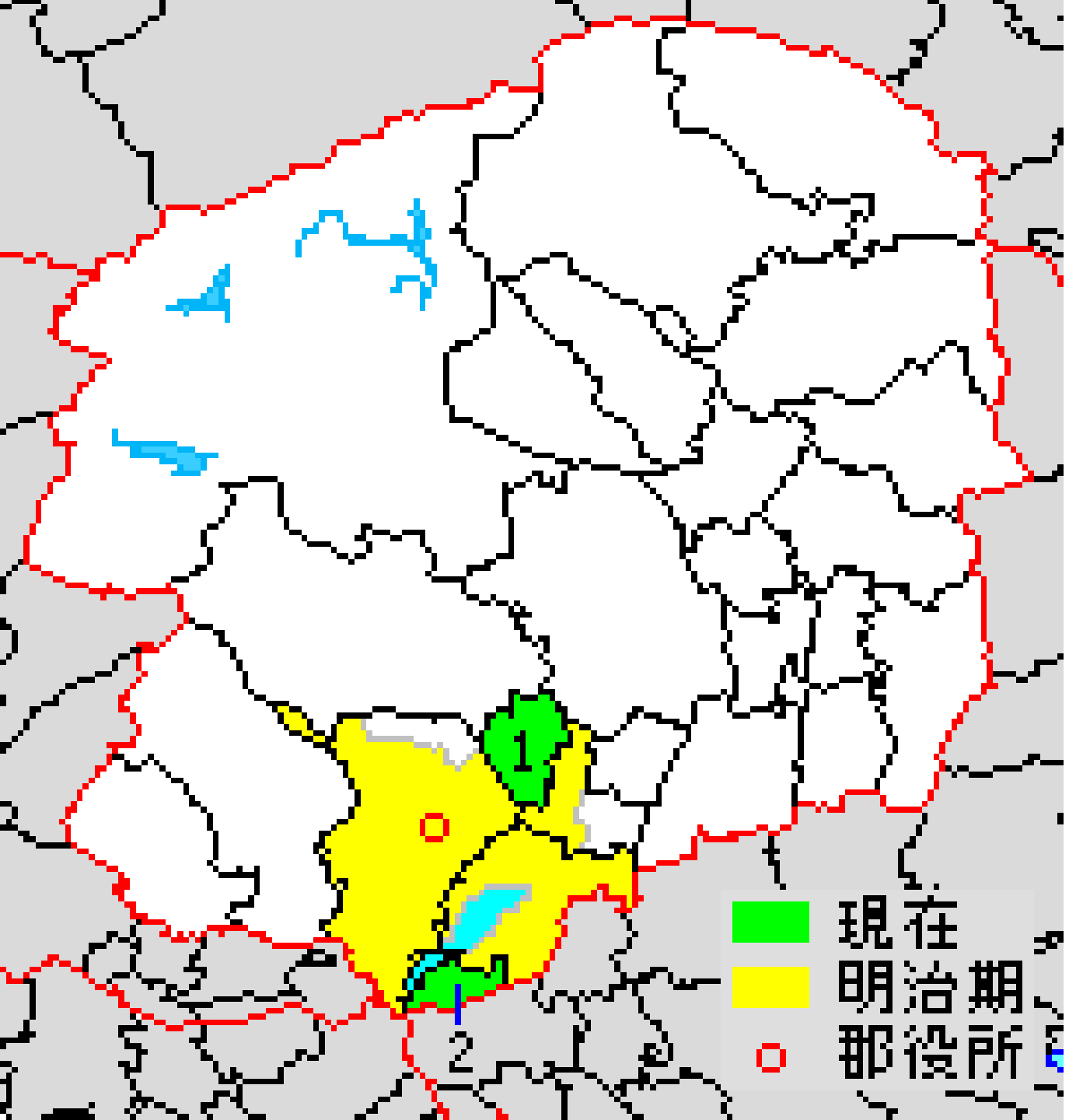
（出典）慈覚大師 円仁 ｜ 天台宗 祖師先徳鑽仰（せんとくさんぎょう）大法会

◆**円仁は延暦13年（794）、今の栃木県下都賀**（しもつが）**郡内で壬生**（みぶ）**氏**（豪族）**の次男に生まれました。**

奇しくも、生まれた年は桓武天皇が長岡京から、都を平安京にお移しになった年でもありました。誕生したとき、生家には**紫雲がたなびいた**（奇瑞：きずい、吉兆）と伝えられます。しかも、桓武天皇が比叡山の根本中堂で初めて法要を営み、平安時代が幕を開けたのもこの年でした。後の円仁と比叡山との深い縁（えにし）を想うとき、円仁は早くから高僧を約束されているような人でもありました。

早くに父を亡くし、母と兄に育てられた**円仁は9歳のとき**、**栃木県の名刹大慈寺**（だいじじ、山号：小野寺山、天平九年[737年] 行基開山、栃木市岩舟町）**の高名な広智**（こうち）**という僧に預けられます。**

◆**円仁15歳の大同3年（808）、広智に連れられ比叡山に登ります。**そこには天台宗を開いて5年目（3年目？）の**最澄**がおられ、円仁をその弟子にしてもらうためでした。**（天台宗の公認が806年なので、3年目か？）**



◎栃木県下都賀郡（しもつが郡）の範囲

1. 壬生町
2. 野木町

水色：後に他郡から編入した区域）

（出典）下都賀郡ウィキペディア

◎ 最澄 と 円 仁

最　澄（さいちょう）	円　仁（えんにん）
７６６年　滋賀県大津市に生誕	
７８５年　比叡山に入る	７９４年　栃木県に生誕
８０４年　唐に渡り８０５年に帰国 ８０５年　日本天台宗を開宗	
８０６年　天台宗が公認される	８０８年　比叡山に入る（１５歳）
８１７年　東国巡錫	８３５年から１３年間、唐に渡る
	８４８年　日光に入る～下山
８２２年　比叡山で入寂（享年５６歳）	８５４年　第３代・天台座主に就任 ８５６年　東国巡回
	８６４年　入寂（享年７１歳）

◎日本仏教（13宗派）

系　統	宗派名	開　祖　、　開宗年	本　尊　、「本　山」
奈良仏教系	法相宗	道昭、662年	薬師如来、釈迦如来、「興福寺、薬師寺」
	律　宗	鑑真、759年	盧舎那仏、「唐招提寺」
	華厳宗	良弁、740年	毘盧舎那仏、「東大寺」
密教系	真言宗	空海（弘法大師）、806年	大日如来、「金剛峯寺、長谷寺」
密教＆法華系	天台宗	最澄（伝教大師）、806年	定め無し、釈迦如来、「延暦寺」
法華系	日蓮宗	日蓮、1253年	釈迦如来、大曼荼羅、「久遠寺、大石寺」
浄土系	浄土宗	法然（源空）、1175年	阿弥陀如来、「知恩院」
	浄土真宗	親鸞、1224年	阿弥陀如来、名号、「西本願寺、東本願寺」
	融通念仏宗	良忍、1117年	十一尊天得如来、「大念仏寺」
	時　宗	一遍、1274	阿弥陀如来、南無阿弥陀仏の書、「清浄光寺」
禅　系	臨済宗	栄西、1191年	定め無し、釈迦如来、「建仁寺、建長寺」
	曹洞宗	道元、1227年	釈迦如来、「永平寺、総持寺」
	黄檗宗	隠元、1661年	釈迦如来、「萬福寺」

◎良 弁（ろうべん）……南都六宗の僧

◆良弁（ろうべん、689～774）……奈良時代の華厳宗の僧、東大寺を開山

◆大山寺（おおやまでら）は、神奈川県伊勢原市にある真言宗大覚寺派の寺院である。**大山不動**の通称で知られる。山号は雨降山（あぶりさん）。**本尊は不動明王**。開基（創立者）は**良弁**と伝える。

◆『大山寺縁起』（内閣文庫本ほかでは一般に『大山縁起』）によれば、大山寺は天平勝宝７年（755）、東大寺初代別当（住職の最高位）の**良弁**（689～774）**が自刻の木造不動明王像**を本尊に聖武天皇の勅願寺（祈願寺）として開創したという。天平宝字５年（762）には**行基**（668～749）の遺命により、弟子（高弟）・光増和尚（こうぞう、大山寺第２世）が不動明王像を製作して本堂に奉納したとされる。

（補足）越谷市相模町の**「大聖寺**（だいしょうじ）**」**の山門に向かって左側の説明板には、本尊「不動明王」と**良弁**との事について解説があります。

◎（越谷市関連）大相模「大聖寺」の不動明王

◆眞大山大聖寺の始まり （出典）埼玉県越谷市大聖寺の不動明王 ｜ 寺男のブログ

・今から1270年前、奈良東大寺 別当 **良弁**僧正が聖武天皇に大仏を作れと命じられる
・（勧進）大仏を作る為に全国を巡り基金を募る
・資金集めの途中、相模の国（現・神奈川県）の**大山**（おおやま）で修行をしていると不動明王の姿が浮かび**一本の木から2体の不動像**を作る
・木の先端の部分で作った像は、大山に納め（現・大山不動）**木の根もとで作った像**は、弟子・お供の行者に託し現在の大聖寺裏の川のほとりで休憩をし不動像を置いたら動かなくなる
・不思議に思った行者は、「もしこの土地が気に入ったのならば、軽くなって浮いてみせよ」と心に念じたら、鳥の羽の様に浮き上がり、その光景を目の当たりにした行者たちは、この土地に縁を感じ、小さな坊を建てて不動明王を祀ったのが**この寺の始まり**です
・山号の**眞大山**（しんたいさん）の意味は、木の根元で作られた不動明王がいる・「木の根もと・大元・眞の大山」と言う意味で現在の山号が付けられました

◆１２年に一度、酉（とり）年に**御開帳**されます。（前回は、2017年）

◎（出典）国立国会図書館所蔵江戸期以前寺社縁起関係目録web版 東海道
https://rnavi.ndl.go.jp/jp/oldmaterials/post_1119.html

寺社名	寺社縁起名	書誌タイトル	請求記号
１０．武蔵国			
浄山寺　曹洞宗	野島山地蔵尊略縁起	諸国寺社諸縁起　第4	235-316

十方庵遊歷雜記にみる
浄山寺・大聖寺・その他の名所

（お話会）令和６年８月２４日（土）、浄山寺・耕雲閣にて

NPO法人 越谷市郷土研究会　　（講師）舩岳知康（ふなおか）

▶著者は江戸小日向（こひなた、文京区の町名）の僧侶（浄土真宗、廓然寺、明治１２年廃寺）・釈大浄（津田 大浄）である。**十方庵主**（１７６２～１８３２）は、名を大浄、字（あざな）を敬順・宗知という。文化八年（１８１１）、五十一歳のときに寺のことを子に譲った。遊歴雑記の序文は文化十一年（１８１４）八月の日付となっている。**十方庵敬順が十九世紀前半の江戸付近の名勝古跡を遊歴踏査した紀行文である。全５編。全５編の中には、越谷について５件の著述がある。**

①初編　巻之上　第五十一　大相模大聖寺の不動尊
②二編　巻之上　第十四　埼玉郡大林村川添の桃園
③二編　巻之上　第十五　野島村浄山寺地蔵尊
④二編　巻之下　第五十五　越谷の驛塩屋吉兵衛が饗応
⑤五編　巻之下　第四十八　越ヶ谷塩吉が振舞両度の逍遥

◎『十方庵（じっぽうあん）遊歴雑記』

（出典）十方庵遊歴雑記 総目次 -Coocan　charlie-zhang.music.coocan.jp/LIB/10PO.html

	原書項目	現在地	注・補足
初編　巻之上　第五十一	**大相模村大聖寺の不動尊**	埼玉県越谷市相模町	＊大相模不動尊，真大山大聖寺，髻奉納
二編　巻之上　第十四	**埼玉郡大林村川添の桃園**	埼玉県越谷市大林	＊鎧通し（桃），土橋
二編　巻之上　第十五	**野島村浄山寺地蔵尊**	埼玉県越谷市	＊野嶋山浄山寺（子育て地蔵尊），片目地蔵の伝説，地蔵の釣鐘未確認
二編　巻之下　第五十五	**越谷の駅塩屋吉兵衛が饗応**	埼玉県越谷市	＊池田吉兵衛
五編　巻之下　第四十八	**越ヶ谷塩吉が振舞両度の逍遥**	埼玉県越谷市御殿町	＊油屋／塩屋吉兵衛：一説に市内「御殿跡」に屋敷，池田山鼎，遠山瀾閣，青木一夢，館万里，浄山寺（同市野島）

◆　【はじめに】

本目次は国会図書館・近代デジタルライブラリー所収『江戸叢書』３～７巻に収録されている，釈敬順『十方庵遊歴雑記』の目次をＯＣＲにて文字情報に変換，ＨＴＭＬで表に組み，現在の所在地や注を付したものである。『遊歴雑記』は地誌・民俗学の書においてもよく引かれ，庵主（あんじゅ）のような江戸歩きマニアにとっては大先達（だいせんだつ）の大著であるが，Web上には現在使用可能，簡便な内容リストがなく検索が難しい。

以下は、「**十方庵遊歴雑記**」の原本の文字が見づらい為、

あらためて入力した。（編集： 舩岳知康[ふなおか]）

（補足）

①原本の判読不能箇所は、“？”　マークにしている。

②「いろいろ」の様な繰り返しの言葉は、
原本通りに「いろく」と入力している。

③「ときどき」の様な繰り返しの言葉は、
原本通りに「ときぐ」と入力している。

大相模村大聖寺の不動尊

初編　巻之上　第五十一

（１）

◎下総成田山不動と比較した著述がある

五十壹　大相模村大聖寺の不動尊・①

一、武州足立郡大相模村大聖寺天台の不動尊は、草加の驛より北東の方貳里にあり、その路すじは草加宿の先加茂とかやいえる立場（たてば）の建石より右の畑道を入て一里にあり、此途すがらは春は、梅桃椿さくら梨花連翹（れんぎょう）杏（あんず）の花をはじめ、楓（かえで）の芽吹にいたるまで優にをもしろく、夏は杜若（かきつばた）杜鵑花（さつき）とらの尾夏雪なでしこ、又所々の蓮池には紅白の色をまじえて、咲し風情又あるべしとも思はれざりき、予此邊に逍遊する事三度、中秋の末つがた綿畠のわたの花のみえたるも、最めづらしく殊更路傍には、秋の草々の花咲みだれし様は實に面白し、土地又一品なるものをや。

花に咲　風までぬくし　わたはたけ　鮮僧　以風

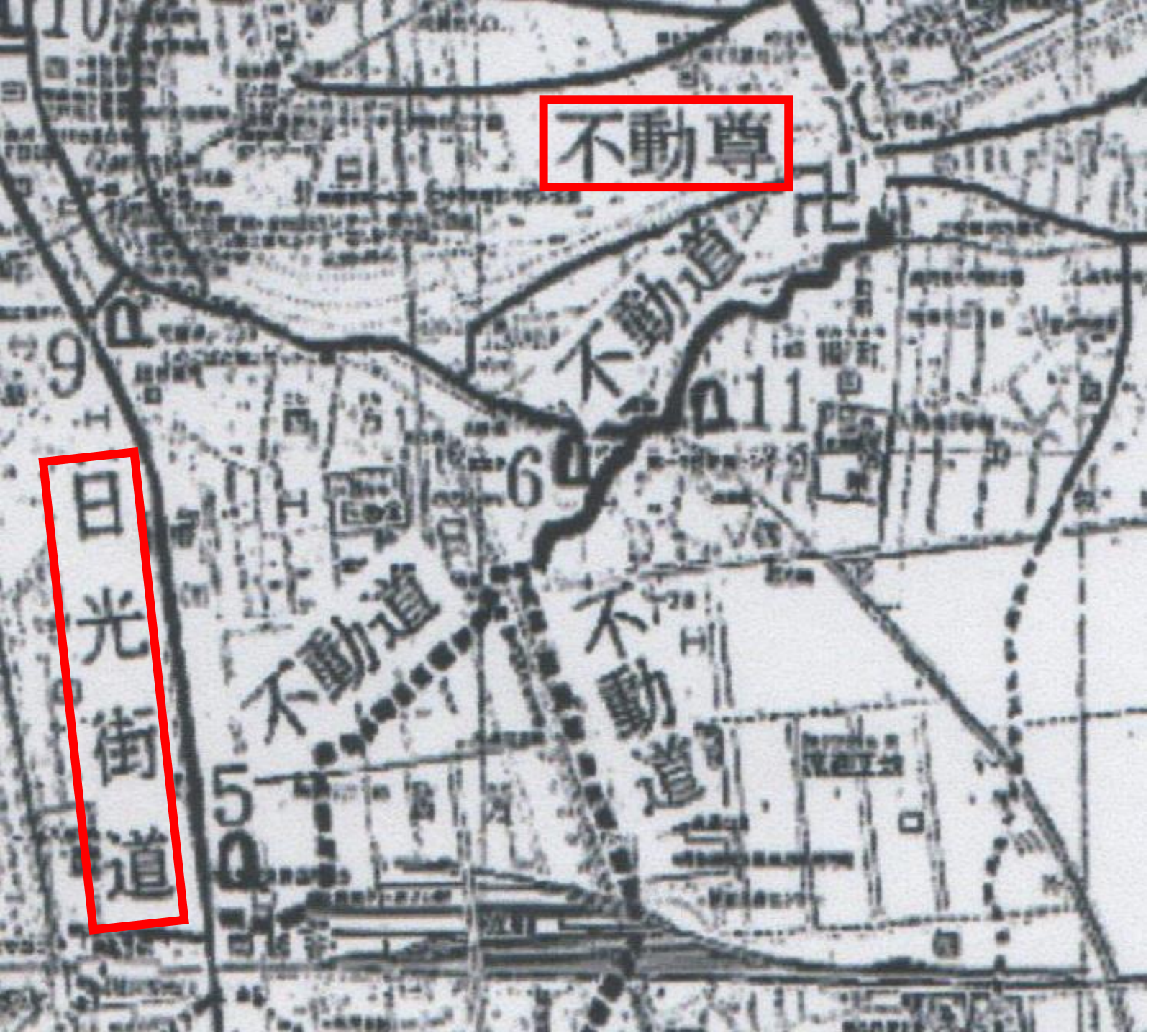
斯て（かくて）大相模村の入口より切石（きりいし）敷ならべ、農民の埴生（はにゅう）も町家に似て、路傍の両側に軒をならべて、その間四五町と覚ゆ、頓て（やがて）大聖寺の門前にいたれば、法則の高札を建たり、當院寺領六拾石、末寺近隣に六院ありて、段々繰上に次第して當寺を住職する事となん、制札（せいさつ）左のごとし、

禁制

一山内の竹木不可伐取事
一山林の内殺生堅不可致事
一狼藉の輩於有之召捕置可訴出事

寛保四年甲子貳月

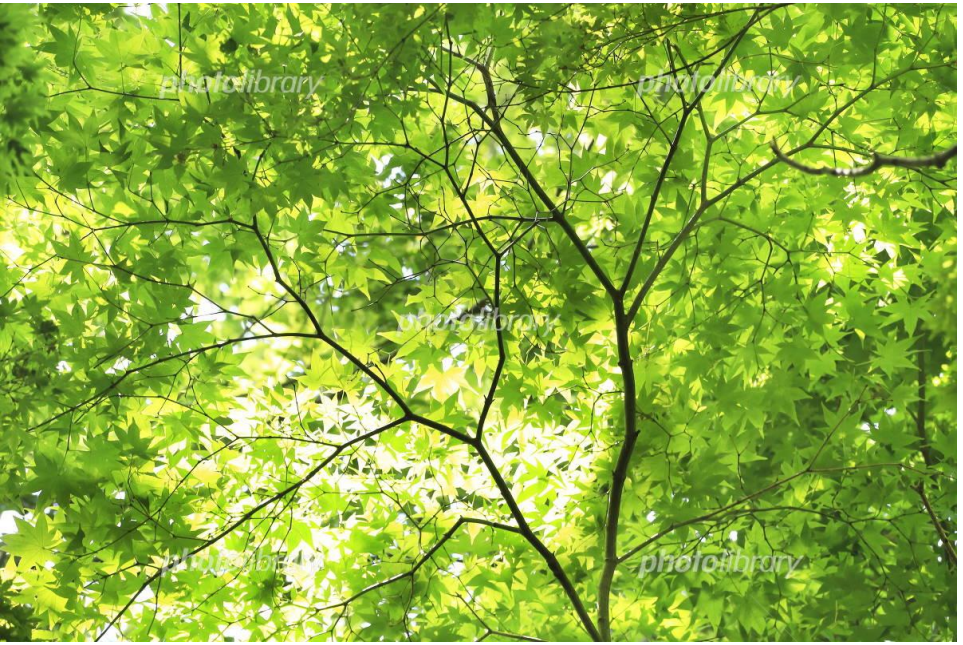
（注）①本文1行目の「天台」は、真言の誤りか？
②とらの尾・夏雪・なでしこ
③鮮僧とは、朝鮮人の僧侶のことか？
④於有之（これ有るに於いては）
⑤可訴出（うったえいずべく）



◎その路すじは草加宿の先加茂とかやいえる立場（たてば）の建石より右の畑道を入て一里にあり、

（左図は、加藤幸一氏の研究）

春の花



左から、梨・れんぎょう・あんず
下は、かえで

（出典）：花の画像
bing.com/images

左は、綿の花
（中秋の頃）

左から、とらの尾・夏雪・なでしこ

（出典）：花の画像
bing.com/images

夏の花

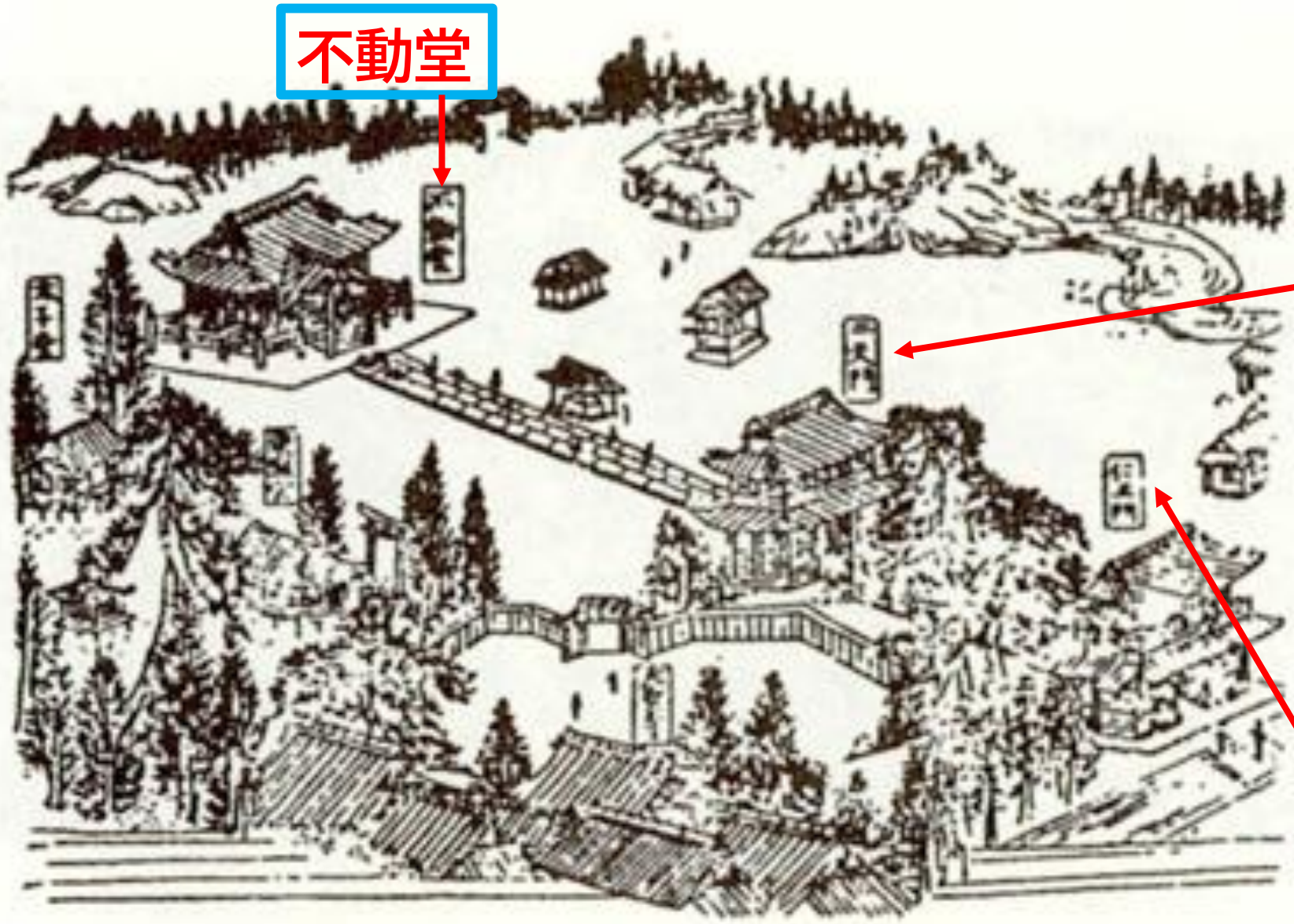
左から、かきつばた・さつき・蓮

◎文政年間（1818～1829年）

◎二天門とは、左右に一対の仁王像を安置した寺の中門。仁王の代わりに多聞天と持国天を置く場合もある。

▼十方庵主の紀行文に基づいて補足すると、

二天門ではなく、二重家根の矢大臣門（随身門）ではないか



文政年間の大聖寺の境内図（『新編武蔵風土記稿』より）

五十壹　大相模村大聖寺の不動尊・②

右寛保四年（1744）より文化十酉年（1813・とり年）にいたりて、七拾餘ヶ年に及べり、當寺の不動尊は、相模の國大山不動の根本たるによって土地を大相模といひ、山號を眞大山といふとかや、境内甚廣く、南の仁王門より眞北に向って、不動堂にいたる間凡貳町（にちょう）、平坦の境内なれども、門外よりの見晴は、下總成田山よりは遙にまされり、惜い哉加茂よりは一里に遠く、又越ヶ谷の驛よりは裏門まで貳拾町もありて、街道の路傍ならねばかゝる霊地の古跡も、都鄙（とひ）の參詣少なく、廿八日（縁日）の外は群參せずして、知らざる人あるは恨みといふべし。

一、仁王門は、往来の南向ふにありて、しかも棟高く彫ものは巧工（こうこう）を盡し、取分（とりわけ）右の角より貳本目の柱の上に、牡丹をくわへし獅子の容體、いかなる番匠（ばんしょう）が作りしやらん、此門東西五間餘南北貳間、上には眞大山と書し竪額（けんがく）あれど、筆者の名及び印なし、此門を過て矢大臣門まで凡壹町餘、左りの方は僧坊は甍（いらか）をつらね、塀の外面には出茶屋おのく床几（しょうぎ）をならべ、右の方は尼店（あまだな）とかやいふもの庇（ひさし）をおろして、小間物類をはじめ心くの商ひは、所柄（ところがら）とて見馴ぬ（みなれぬ）品々をならべかさるも又めづらしく、頓て（やがて）矢大臣門近き右の側に垢離場（こりば）あり、此あたりより境内次第に末廣がりにて奥深く、

（注）①垢離場とは、水垢離の行（ぎょう）をする場所。
②獅子に牡丹とは、堂々たる獅子の姿に、華麗な牡丹の花を配した図柄。取り合わせのよいもののたとえ

五十壹　大相模村大聖寺の不動尊・③

既に矢大臣門は二重家根の樓門にて上下に額あり、上なるは弘法の筆意にして不動尊と書、下なるは佐理卿（平安時代中期の公家・藤原佐理）の筆法を以て、眞字に不動尊と認めたり、但し貳額ともに筆者の名印なきこそ恨みなれ、矢大臣門大さ東西五間餘南北貳間、是より本堂まで貳拾餘間もあらんか、右に鐘樓堂、左りにはもろくの天部の類、天神地祇の小社あり、又右手の方には、酒樓食店の家居も五七軒見ゆ、又不動堂の北裏に門あり、これ越ヶ谷の驛へ通じ、又東にうら門あり、是つゐひじ等へ往還なりとぞ、且又門前には旅店商家等軒をならべて建つゞきたる様、かゝる片鄙に此精舍ありて、例月廿八日（縁日）は殊に賑はしく、都鄙の男女群集するは、名誉にして著明き霊験もあるにこそ。

一、不動堂は八間四面四方勾欄（こうらん）にして、南面に作れり正面の御厨子（みずし）には公の御紋を髙彫（たかぼり）にすべく、内陣壯厳の結構首尾共に満足し又心々の志願に依て、男女の髻（もとどり）を切て何處となく納めたるあり、或は繪馬をはじめ、いろくの寄進奉納の品は、堂内に夥しく（おびただしく）目を驚せり、此堂四方勾欄のまはり、檐（のき、ひさし）をば雨ふる日は、参詣の諸人足を穢さず（けがさず）、衣裳を濡さずして、百度の心願を達する様に作事せしは、成田山の不動堂にかはらず、

（注）①「つゐひじ等へ」の「つゐひじ」とはどこか。
↓↓松伏町築比地か？

（補足）男女の髻（もとどり）を切て何處となく納めたるあり↓↓命が救われたお礼の奉納ではないか

五十壹　大相模村大聖寺の不動尊・④

且正面に**阿遮殿**（あしゃでん）と横三字にしたためし額は、朝鮮國愼齋（しんさい）の筆にして、名印ありくと見へて、額大さ横六尺ばかり竪三尺餘あるべし、是又古来より奉納の繪馬若干ありて、文禄（1592～）、慶長、元和、寛永（～1643）年間等あれば年古し道場と見ゆ、彼下総成田村の不動は、中古より不圖（ふと）繁昌し、近年作事悉く（ことごとく）成就し、本堂鐘樓経堂三重の塔樓門、本地堂奥の院籠り堂（こもりどう）をはじめ、別當新勝寺の門玄關坊舎は勿論、表通り石の玉垣にいたるまで、約か（つづまやか）に首尾満足し、容體作事等に於ては、不動の第一といへども寺領とては堀田相模守より**五拾石**を充行ふ（あておこなふ）のみなり、今此大さがみの大聖寺は、相州大山の根本として六拾石の御朱印を賜ひぬるは、年代久しき不動堂にこそ、江戸より凡六里には遠し、

（注）①中古は平安時代（794～1192年）を指す
②寺領とては堀田相模守より**五拾石**を充行ふ
↓↓宝永2年（1705年）－佐倉藩主・稲葉正通が、成田村囲護台（いごだい）の新畑50石を、新勝寺に寄進する。

（補足）本文②から引用↓↓疑問が残る所

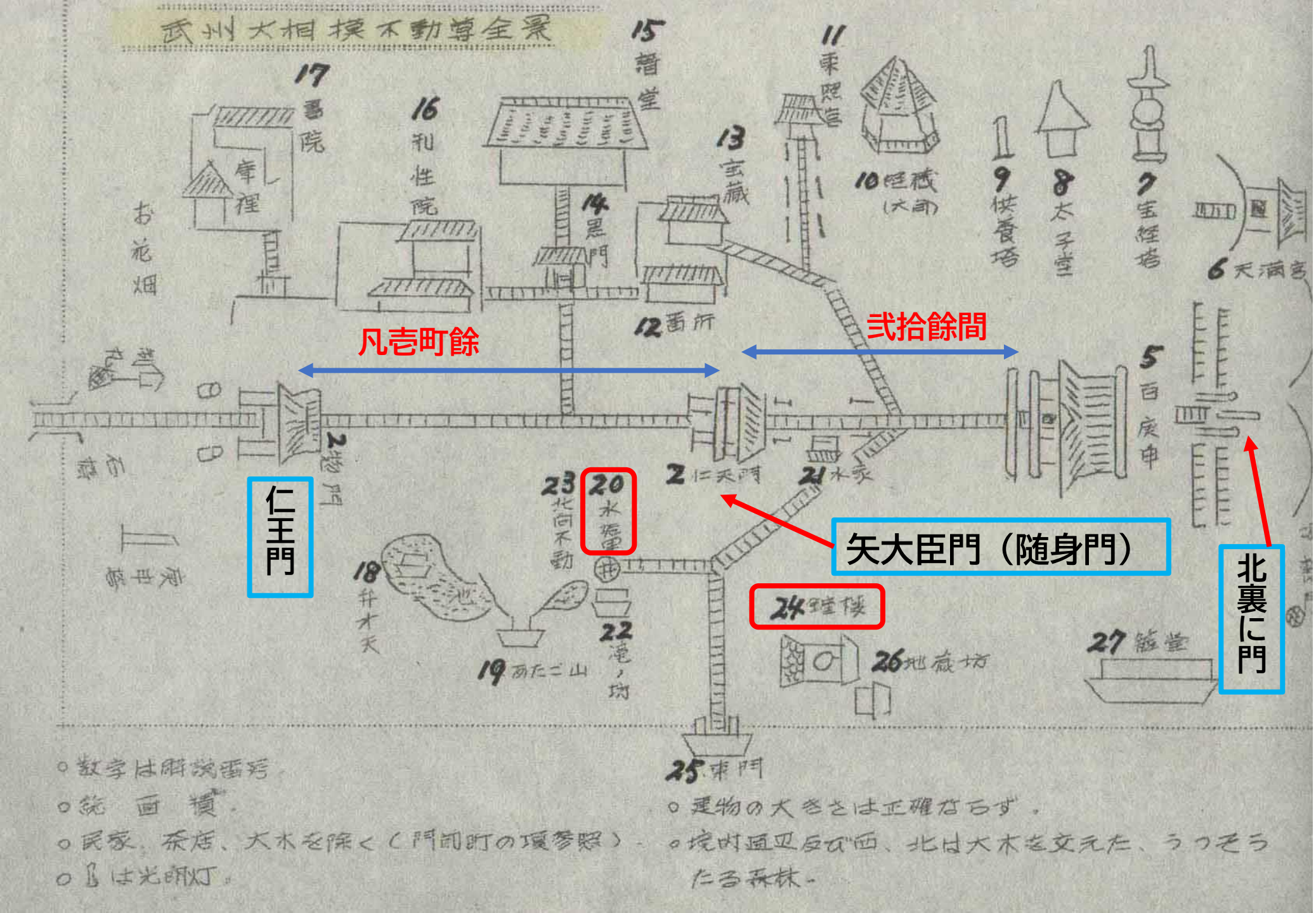
▼南の**仁王門**より眞北に向って、不動堂にいたる間**凡貳町**（にちょう）、↓↓貳町（218m）

▼**仁王門**は、往来の南向ふにありて、↓↓仁王門は現在位置より南にあったことが考えられる

▼此門（仁王門）を過て**矢大臣門**まで**凡壹町餘**、↓↓ご住職曰く、現在の一対の燈籠の所に、矢大臣門があった。現在の仁王門と燈籠の間は壹町（109m）もない

武州大相模不動尊全景

▼十方庵主の紀行文に基づいて、補足すると、
◎矢大臣門は、二重家根の楼門
◎仁王門から矢大臣門まで、凡壱町餘（約１１０ｍ餘）
◎矢大臣門から本堂まで、弐拾餘間（約４０ｍ）
◎左図２０は垢離場（こりば）。左図２４は鐘楼堂



（補足）

▼仁王門、矢大臣門……②

・日本では寺院の入口の門の左右に仁王像が立っている**仁王門**をしばしば見かける。像容は上半身裸形で、筋骨隆々とし、阿形像は怒りの表情を顕わにし、吽形像は怒りを内に秘めた表情に表すものが多い。こうした造形は、寺院内に仏敵が入り込むことを防ぐ守護神としての性格を表している。

・矢大臣（やだいじん）は、神社の**随身門**の左右に安置されている、随身の装束をした2神像のうち、向かって左方の弓矢をもっている神像。

・神社の門守（かどもり）の神である。箭（や）を負うことから**矢大臣**といい、**随身門を矢大臣門**ということがある。しかし大臣ではなく、看督長（かどのおさ）である随身である。

▼男女の髻（もとどり）を切て……③

・出家する

・刑罰として「髻を切れ」と命じられるのは死罪に準じるという意味です

・亡くなった人の菩提を弔うために、長い期間部屋に籠って読経をして過ごすということ

▼成田山不動尊……④

・成田山新勝寺の御本尊不動明王は、真言宗の開祖、弘法大師空海が自ら一刀三礼の祈りをこめて敬刻開眼された御尊像です

・開山は平安時代中期の**天慶3年（940年）**と伝えられる。

・宝永2年（1705年）－佐倉藩主・稲葉正通が、成田村囲護台の新畑50石を、新勝寺に寄進する

▼堀田相模守……④

・**堀田 正亮**（ほった まさすけ、1712～61年）は、江戸時代 中期の 大名、老中 首座。出羽国 山形藩主、下総国 佐倉藩 初代藩主

・「守（カミ）・介（スケ）・掾（ジョウ）・目（サカン）」は、国司を任命する際の役職名（四等官）として用いられていたもので、律令制に端を発する。国司制度は中世になって崩壊するが、**武家官位は変貌を遂げながらも近世にまで継続していく。**

埼玉郡大林村川添の桃園

二編　巻之上　第十四

（２）

十四　埼玉郡大林村川添の桃園・①

一、武州埼玉郡大林村の桃園は、越谷の驛の西北五六町にありて、街道より左へ入て凡壹町にあり、此邊川筋にそひ南北凡十五六町幅又三四町、見わたす處桃林ならずといふことなし、此桃の樹の下それぐの麥（むぎ）及び菜園を仕付たり、往来を逍遙しながら両側を眺望すれば、右は桃林左は川添にして、立枯となりし葭蘆（あし）の風情、總て（すべて）川筋冬枯の景望は兎角の論なし、されば此桃林の花咲頃は風色嘸（さぞ）と思はる、予中冬の晨（しん）通行して花の頃を見されば論しがたし、中夏の末鎧通し（よろいとおし）と號してひさぐ桃は是なり、彼利根の川添なる二十五里村（ついへいじ村）の桃林は、是より抜群廣くして勝らんかし、扨（さて）此大林村の桃園より川にそひて、西の方三の宮村といふまで行程凡四十餘町の間、橋二ッ三ッありて長さいづれも、十四五間幅二間ばかりもあらん、但しこれらの橋みな向ふ前を土橋にして、四五間つゝ川岸より持出し、眞中を三四間長く厚き板を四五枚ならべわたしたり、是は洪水の節土橋の崩れ流れん事を察し、出水の砌は眞中の板のみ取反（とりかえ）て逆流を通さんが為と見ゆ、されど橋の様式城に見馴ざれば又めづらしく、

（注）①中夏は6月はじめの芒種（ぼうしゅ）から7月初めの小暑までの時期
②ついへいじ村は、松伏町築比地か？

十四　埼玉郡大林村川添の桃園・②

山水の古畫などに書る圖（え）に似たり、旦又三の宮の土橋の袂（たもと）に、片庇（かたびさし）にさし懸したる茶店ありて、往来の者多くはみな爰に（ここに）憩ふ、此處（ここら）の風色自然にして又面しろく、此川岩槻のあなたより流れ来りて、越谷の驛中に横たはり、末は利根川に合流すとなん、その川筋溶りて水隈（みぐま）の景望一品ありて古雅といふべし、此處より東の方は越ケ谷の驛へ四十五町、まくりへ二十五町、又西は岩槻へ一里半、南は野島村地蔵尊の裏門まで四町餘ありと巷談す。

（注）①水隈（みぐま）とは、水流が岸に曲がり込んで入っている所

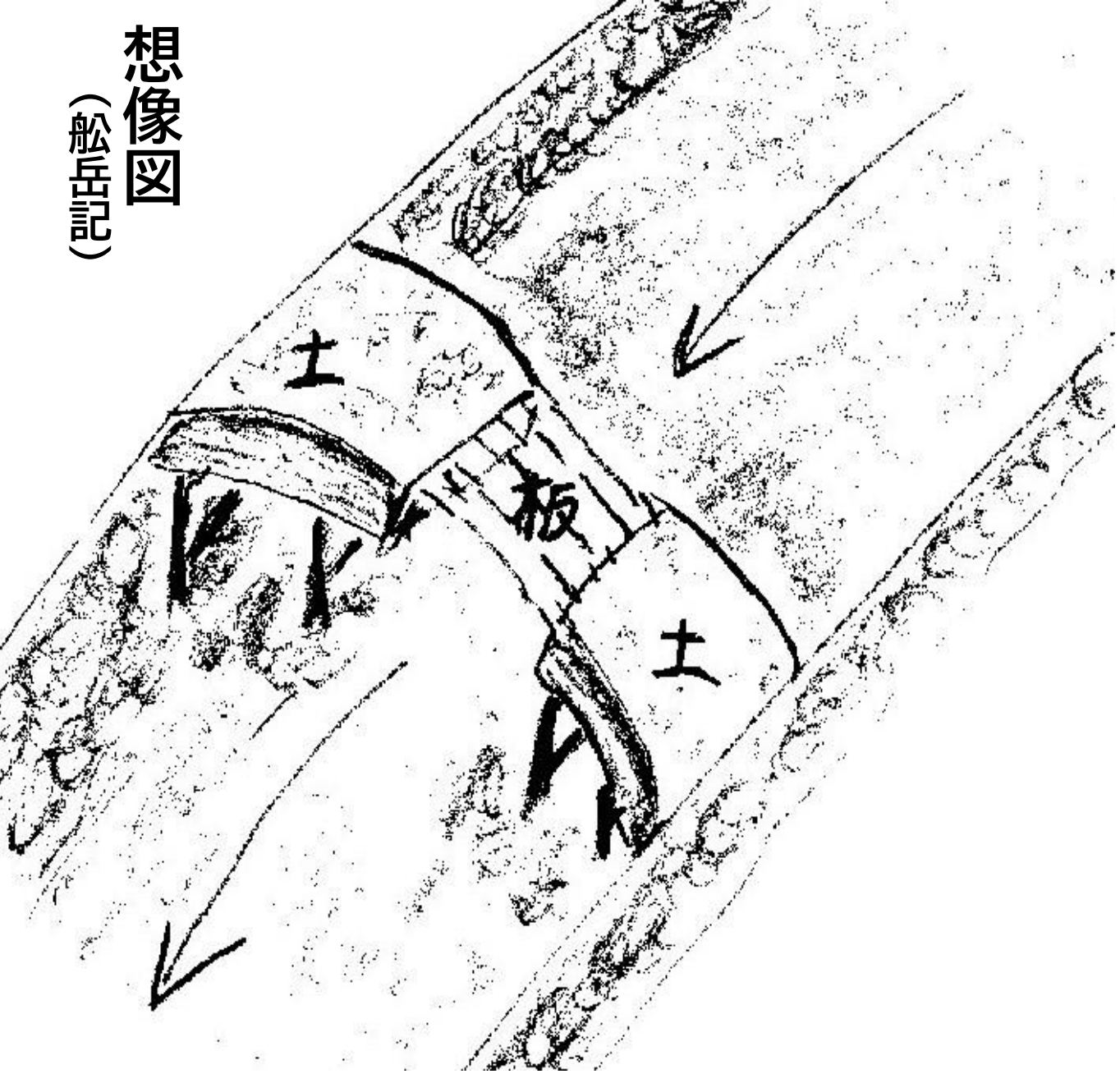
（補足）

▼鎧通し（よろいとおし）と號してひさぐ桃……①

・戦場で組み打ちの際、鎧を通して相手を刺すために用いた分厚くて鋭利な短剣。反りがほとんどなく長さ9寸5分（約29センチ）。

・ひさぐ…売る。商いをする。

想像図
（船岳記）



（橋の構造）

◎土橋は、左右共に４～５間（7.2～9m）

◎真中の板は、３～４間（5.4～7.2m）の厚き板を４～５枚並べ、

◎出水時は真中の板のみを取り外して、土橋の崩壊を防ぐ

◎**元荒川の川幅**は、１１～１４間（19.8～25.2m）と推測できる

▶**旧暦とは**、簡単に言うと、新暦に変わる前まで使われていた暦で、**明治時代のはじめ（明治5年：1872）頃まで使われていました。**そもそも昔々は、**太陰暦**（たいいんれき）という、月の満ち欠けにより1カ月と考える暦でした。新月がその月の一日で、満月が十五日としていましたが、月の満ち欠けの周期は29日。これではどんどんズレが生じてきてしまいます。そこで、太陽が地球の周りを回る周期に基づいて決められる暦である**太陽暦**（たいようれき）が組み合わさるようになり、太陽の一回帰年を24等分した**「二十四節気（せっき）」**と呼ばれる季節の区分が加えられ、さらには、**「雑節（ざっせつ）」**という区分も取り入れられました。

※「雑節（ざっせつ）」とは、季節の移り変りをより適確に掴むために設けられた特別な日のことです。つまり**旧暦**とは、太陰暦と太陽暦を組み合わせた**太陰太陽暦**（たいいんたいようれき）に基づいて決められた暦のことなんです。

▶**新暦とは**、もともとの太陰太陽暦（旧暦）を改め、**明治6年（1873）から太陽暦【＝グレゴリオ暦】**が採用されるようになりました。暦が新しく変わったということで、新しく採用された現在の**太陽暦**のことを**新暦**と呼んでいるわけです。

	新　暦	旧　暦
春	3～5月	1～3月
夏	6～8月	4～6月
秋	9～11月	7～9月
冬	12~2月	10～12月

《出典》
旧暦とは？新暦との違いやずれ（差）＆季節区分など …

二十四節気（せっき）

《出典》
みんなの知識 ちょっと便利帳
https://www.benricho.org/koyomi/24sekki.html
二十四節気および七十二候 - 立春、春分、立夏、大暑、冬至 ...

二十四節気（にじゅうしせつき）

春

立春（りっしゅん） 2月4日頃	春分（しゅんぶん） 3月21日頃
雨水（うすい） 2月19日頃	清明（せいめい） 4月5日頃
啓蟄（けいちつ） 3月6日頃	穀雨（こくう） 4月20日頃

夏

立夏（りっか） 5月6日頃	夏至（げし） 6月21日頃
小満（しょうまん） 5月21日頃	小暑（しょうしょ） 7月7日頃
芒種（ぼうしゅ） 6月6日頃	大暑（たいしょ） 7月23日頃

秋

立秋（りっしゅう） 8月8日頃	秋分（しゅうぶん） 9月23日頃
処暑（しょしょ） 8月23日頃	寒露（かんろ） 10月8日頃
白露（はくろ） 9月8日頃	霜降（そうこう） 10月23日頃

冬

立冬（りっとう） 11月7日頃	冬至（とうじ） 12月22日頃
小雪（しょうせつ） 11月22日頃	小寒（しょうかん） 1月5日頃
大雪（たいせつ） 12月7日頃	大寒（だいかん） 1月20日頃

みんなの知識 ちょっと便利帳

雑節（ざっせつ）

《出典》雑節 - 日本の年中行事

雑節の名称	いつ？	雑節の名称	いつ？
節分	立春の前日	**土用（土用の丑の日が有名）**	•春の土用：太陽黄経27度～立夏の前日 •夏の土用：太陽黄経117度～立秋の前日 •秋の土用：太陽黄経207度～立冬の前日 •冬の土用：太陽黄経297度～立春の前日
八十八夜	立春から数えて88日目	**お彼岸**	•春の彼岸：春分の日の前後7日間 •秋の彼岸：秋分の日の前後7日間
入梅	太陽黄経80度		
半夏生（はんげしょう）	太陽黄経100度		
二百十日	立春から数えて210日目		
二百二十日	立春から数えて210日目		

《補足》

①**土用の 丑 の日** （どようのうしのひ）は、夏の 土用 の期間にある 丑の日 のこと。

②**太陽黄径**とは、太陽が１年かけて１周するように見える移動経路を**黄道**（こうどう）として、
春分が始まる地点を０度として３６０度に分けたものである。
黄道とは太陽の天球上の通り道で、地球から見たときの太陽の見かけ上の軌道です。

野島浄山寺地蔵尊

二編　巻之上　第十五

（３）

十五　野島村浄山寺地蔵尊・①

一、武州埼玉郡岩槻領野島村浄山寺曹洞は、前にいふ三のみやの橋より西南の方凡四町にあり、裏門は東に表門は南にあり、本堂又南向にして十一間藁葺にて、此中に客殿を作り込たり、佛前の壯厳きらひやかに、又堂内には男女の一ッ身の衣類おびたゞしく天井より釣下たり、これ此地蔵尊へ無難に兒女（じじょ）の成人を願込せしもの納めしと覺ゆ、寺記に曰、野島山延命地蔵尊は、慈覚大師一刀三禮の作にして霊験あらたに、佛縁薄き愚痴の衆生を度せんが為に、佛身を變じて種々の方便身を現し、國土に遊戯しては、その人に随って（したがって）得度なさしめ、毎日晨朝（じんじょう・午前六時頃）入諸定（しょてい）の大願より、錫杖（しゃくじょう）を打ふりて家々にたゝせ賜ひて、攝化（せっけ）隨縁（ずいえん）の方便さまぐにして、或時は茶園に佛眼を損じ、血の涙頻にて（しきりにて）門外の池水に御目を洗はせ賜ふより數百年来、今にいたるまで池に住るもろくの鱗甲（りんこう）一眼に盲たり、それよりして世に誰か片目地蔵と名付たり、就中（なかんずく）一切衆生の眼病を愈し（いやし）賜はんとの誓願、殊に産婦のものには枕上（ちんじょう）に立せ賜ひて神符（しんぷ）を與へ（あたへ）賜へば、立ところに安産し或は神符を掌に握り、又は頭上にいたゞき生する事、今現在人の見聞する處也、然るに浄山寺住職の僧某は、佛身夜なく隣里郷黨（りんりきょうとう）に遊化（ゆけ）し賜へば萬一霊像の失賜はんかと、

十五　野島村浄山寺地蔵尊・②

件の住僧は御背に釘を打、鐵鎖を以て繋ぎ奉り、故、遊化を止させ賜ふとなん、これによりて現報の佛罰逃れがたく住僧は業病にて死したりける、その後日岩といへる僧開帳の折から御背の釘鐵鎖の體見奉る（みたてまつる）に忍びず、即ちぬきまいらせ安座せしめ賜ふとかや、是よりして地蔵尊の神符をはじめ、門前の池水を汲取佛前に備て加持し、是を竹筒に入て信心の徒の需め（もとめ）に應ず、又爰に（ここに）堂内の挾間（はざま）に奉公人請状（うけじょう）の案文を認めて張下たり、めづらしさに筆を費す、その案文に曰、

一、此誰と申者、當何月より来る何年何日迄、地蔵尊へ御奉公指上申處實正也、爲御給金賽錢三銅・被下（くだされ）置難有仕合（ありがたきしあわせ）奉存候、然上（しかるうえ）は心身日々堅固にて無難息災年限相勤候上、御禮參（れいまいり）急度登山可爲仕候、爲其請状仍而如件

年號月日　　所付

人主　誰印

請人　誰印

野島山

地蔵尊

兩御童子

右御奉公人に被成（なられた）の御方は、御目見之御初穂（はつほ）十二銅年限中毎月廿四日御奉公人安全之御祈禱有之、右御祈願料五十銅より御志次第也

（注）①銅銭一枚を「一文」という。

②兩御童子とは、地蔵尊の脇侍として安置している「掌善童子と掌悪童子」か。

◎（右）掌善童子（しょうぜんどうじ）
◎（左）掌悪童子（しょうあくどうじ）
◎本尊（延命地蔵菩薩）の脇侍として安置されていたが、現在、掌善童子は「大権修理菩薩」の横に、掌悪童子は「達磨大和尚」の横に置かれている。ご住職曰く、江戸時代の作。
（出典：左の写真）kawagoe-fujimi.net
http://kawagoe-fujimi.net/2020/11/kokuhojizo
国宝地蔵菩薩ご開帳で越谷市の浄山寺（野島地蔵尊）へ【2月…

◆**大権修理菩薩（だいげんしゅりぼさつ）**は、禅宗、特に曹洞宗寺院で尊重され祀られる尊格である。伽藍神（がらんじん）の1つとされる。

十五　野島村浄山寺地蔵尊・③

一、本堂の前右の方に手水屋形あり、後に鐘楼あり、釣鐘の亘凡三尺つき座の上に地蔵の尊體を前後に鋳付たり、銘の年號など見まほしく延上りみるといへども、ところぐ泥に穢れて（けがれて）老眼に見えがたくて止ぬ、同所左の方にあやしき茶店あり、醴酒（れいしゅ）饂飩(うどん）蒟蒻（こんにゃく）の田樂（でんがく）又は駄ぐわし様の類をひさぐ、依て此食店に憩ひ遠山瀾閣翁は、好て醴酒を食しこゝろみるに、甘き事なければ口直しせんと勸むるにぞ、翁もろとも溫飩（うどん）を食するに、醤油苦みありて味ひがたし、片鄙の食物の麁悪（そあく）なるに歎息して、いよいよ繁花の土地に生れしを有難おもへり、此日途中食事に飢ん事を察し、越谷の驛にて餅は名にあふ搗たて（つきたて）なる餡（あん）ころ餅を、両人腰兵糧に用意せしまゝ飢ざりし、左なくば**鳩がやの驛**まで五里餘の途中食物に窮迫せん、殊更霜枯の折柄にして人通りなければ、出茶屋とてもなく行路只寂寥（せきりょう）として、感慨の情ますく深し、斯て（かくて）浄山寺の表門を立出門前の池水を見る、大さ凡**拾五六間四方**もあるらん、水黄み濁り**中央に島**あり、大さ二三間築山の如し、むかし地蔵尊茶園にて目を突、此池水にて目を洗ひ賜ひし因縁にや、此池中に出生する鯉鮒蛙の類まで**片目**となん、

十五　野島村浄山寺地蔵尊・④

竹筒に入て加持して與ふる（あたふる）水は即ち是也、此寺の境内凡**二町四方**もあるらん、是より右に添北をさして岩槻へ一里半餘、又西南をさして田耕地の中路を行事一里餘にして**釣上**（かぎあげ）**の神明**に至る、此途すがら四方只渺茫（びょうぼう）として更に村邑なければ人家なし、陌頭（はくとう）まぎらはしく路を間に便至りて憂し（うし）、されど取はなれて四方を眺望するの風色一品ありて面白し、**一度は行べし二度は行べからず**、後の雅人逍遥してしるべし。

（注）

①醴酒（れいしゅ）とは、甘酒。
②加持（かじ）とは、仏の加護
③「釣上の神明」とは、岩槻区釣上の神明社。

（補足）

▼**男女の一ッ身の衣類**……①

・**一つ身**は、赤ちゃんから2歳くらいまでの幼児用の着物です。

▼**奉公人請状**（うけじょう）……②

・簡単にいうと江戸時代の労働契約書です。現代とは逆で雇用主ではなく、雇われる側が労働条件等を書いて雇用主に提出します。また雇われる本人が奉公人請状を書くのではなく、身元保証人の父兄など親類縁者が書きました。

・**所付**（ところづけ）とは、住所、名前などをしるした書付。**人主**（ひとぬし）とは、江戸時代、請人と並んで奉公人の身元を保証した人。**請人**（うけにん）とは、鎌倉時代から明治維新まで売買・貸借・身元保証などの契約の際に保証人になった者

・ご住職曰く、**奉公人**とは地蔵尊の奉公人をいう

越ヶ谷の驛塩屋吉兵衛が饗応

二編　巻之下　第五十五

（４）

◎二十五里村（ついへいじ村）の桃林

◎野島の開帳（元荒川を舟で参詣）

五拾五　越ヶ谷の驛鹽屋吉兵衛の饗応・①

野島の地蔵尊も、明日より居開帳なれば見物して、岩槻邊を逍遥せんか、但し利根の川縁なる二十五里村（ついへいじ村）の桃園は、一里四方みな桃林にして此處より路すがらは、松伏村堰わく通りの耕地尤（もっとも）よろしく、大相模の不動尊へ詣でてか、是より行程凡三里あるべし、いづれにやせんなど、相互に咄しながら臥ぬ、斯て（かくて）明ぬれば三月廿一日、大師（弘法大師）の御影供（みえいく）なれば、埼玉郡末田村島の金剛院密宗は、野島の地蔵より岩槻へ通行する路傍にして四五町、これに御影供の法要ありて賑ふよし、野島の開帳へ参詣して、金剛院へも立寄ばや、岩槻の城下を一見し、角浦の浄國寺へも詣でなんと衆議一決し、そろく身拵する（みごしらえする）折から、

（中略）

野じまへ参り賜はゞ舟にて送りまゐらせん、我も同道し見送ながら罷らん（まからん）と留らるゝにぞ、過分とはいへど又候や、船中酒長じ遅刻して岩槻へも越へず引戻さんは必定也、心入忝なし（かたじけなし）とはいへど振もぎりて打立んものと、

（注）①利根の川縁なる二十五里村
↓↓文禄3年（1594）、利根川を太日川（江戸川筋）に付替
②二十五里村（ついへいじ村）の桃園はどこか。
↓↓松伏町築比地か？、
③松伏村堰わく通りの耕地とは、どこか（田中あたりか）？
④角浦の浄國寺の場所は、岩槻区加倉か。

五拾五　越ヶ谷の驛鹽屋吉兵衛の饗応・②

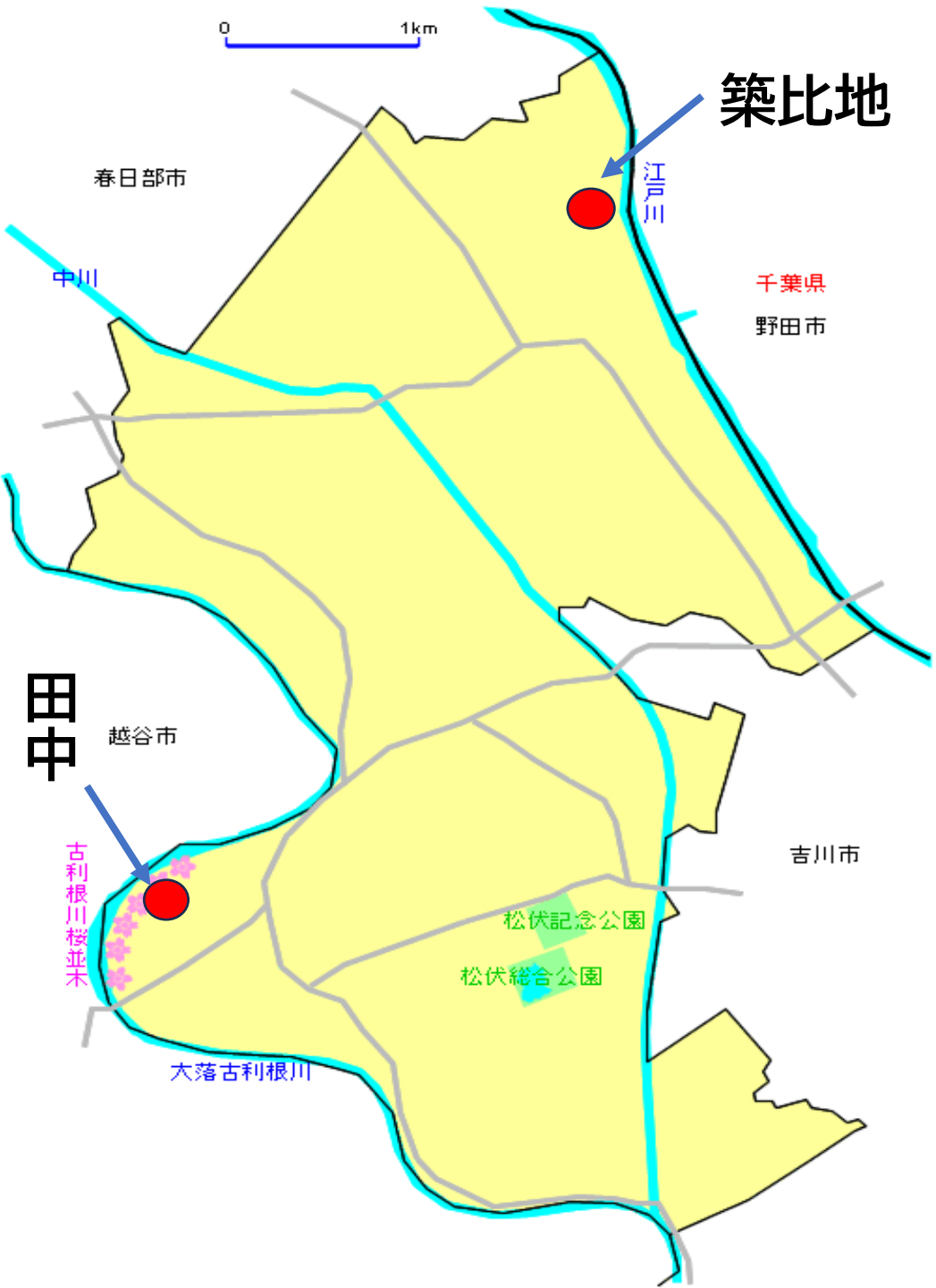
（中略）

しからば兎も角もと座敷へ通り、一つ二つ咄する内舟とゝのひぬ、乗賜へと案内につれて、中庭より北をさして居屋敷の中をゆく凡三町にして、耕地の中路にいたる、是より西の方數十歩に堤あり、堤の下に江河（こうが）あり、川幅凡三十餘間（54m）清泉漲り流る、西岸川添の風景天然にして眺望又いふべからず、爰に（ここに）舟二艘を繋り、一艘には天幕を張毛氈（もうせん）敷詰たるはわれらが馳走の舟也、次の一艘には膳椀皿砂鉢をはじめ萬の器物及び諸々の魚鳥野菜の類、酒も龜屋の菊とかやいふもの一樽を積入、今一艘は曲突鍋釜炭薪生膾板をはじめ料理人小使船頭の類五七人乗れり、時刻は暫く巳の刻（9時～11時まで）に及ばんとするに、目の下壹尺七八寸にも及ぶ鯛より種々の海魚又品々珍らしき青物類若干積入たるは、夕べ午の刻（11時～13時）よりも本舟町多町の両所へ、早馬にて買上たるものにてやらん、實に吉兵衛が叔母が配慮假初（かりそめ）の事にあらず、斯て（かくて）瀾閣一夢萬里山鼎愚老又吉兵衛が叔母といふ老女都合六人、件の舟に乗泛て川添の風景、又は橋の上の往来のいろくの風俗もおもしろく、右を見たり左りをながめ良時移りて清談すといへども、

二十五里村（ついへいじ村）

松伏町築比地か？

ピンク色は、桃畑を表す



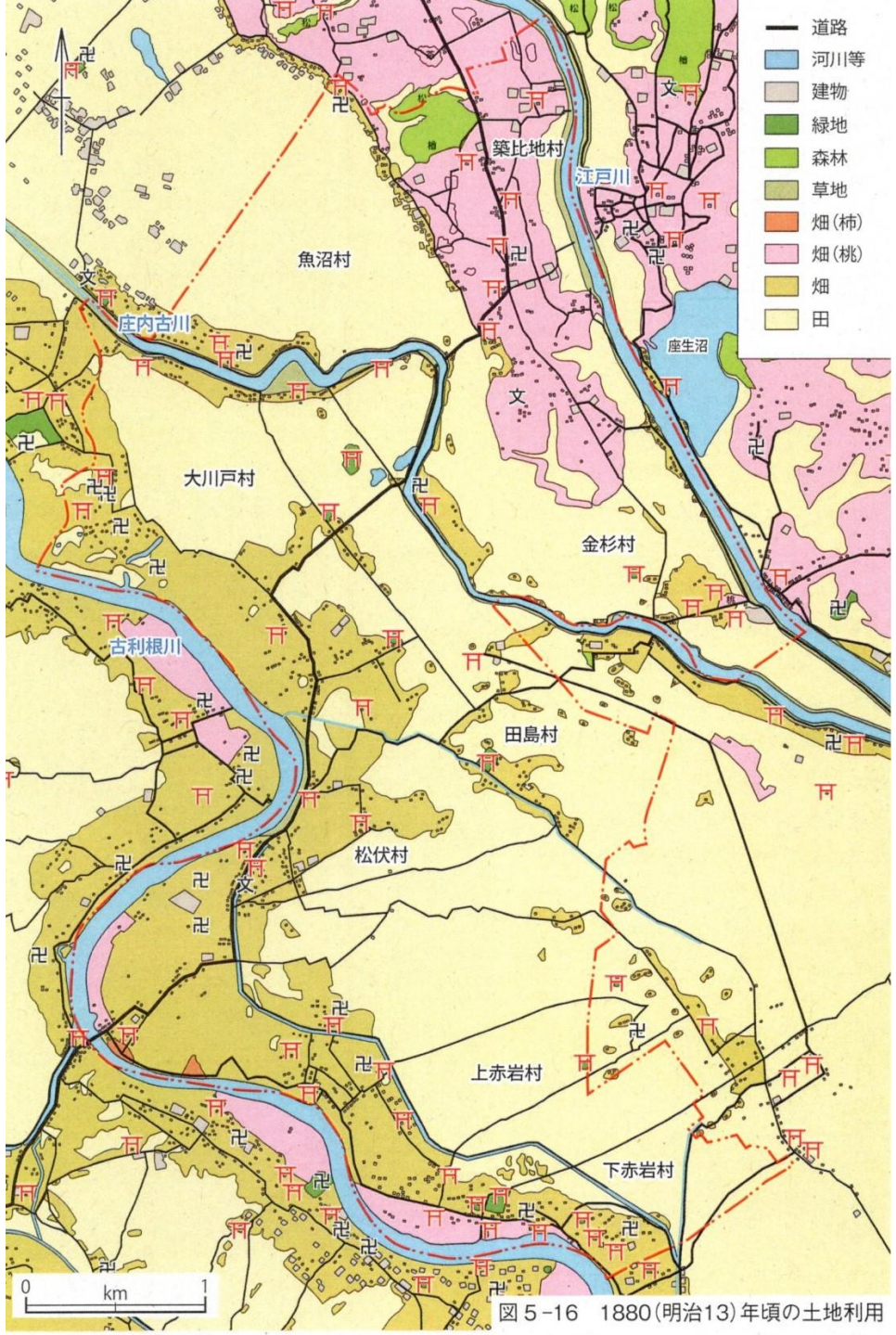


図 5-16　1880(明治13)年頃の土地利用

《出典》松伏町史　自然編

◎桃色は、桃畑を表す

図 5-16　1880(明治13)年頃の土地利用

越ヶ谷塩吉が振舞両度の逍遥

五編　巻之下　第四十八

（５）

◎野島の開帳　　◎大林の蛍

◎二十五里村（ついへいじ村）の桃林

◎まくりの立場の鰻魚

四拾八　越ヶ谷鹽吉が振舞両度の逍遥・①

幸ひ此節野島の地蔵開帳にて、陸路壹里に遠ければ舟にて御供し御案内申さんと用意致し置候へば、

（中略）

是より浄山寺へ二町といえへり、斯て（かくて）おのく舟揚りし上戸（じょうご）の徒は、機嫌に任せて川内へ浮れ入ぬ、片鄙とはいひながら群参する事江戸に替らず、但し九分は近郷の男女にして漸く壹分たらずは、東武の風俗と見請たり、

境内狭からねど小間もの人形見世、飴や、菓子や、蕎麥や、團子屋、爛酒の類より、曲搗の粟もち、獨樂まはし、居合抜の歯みがき賣、覗からくり、鼠の木札くわへて中り？に取らする、扨は（さては）其の書畫の早書、奉納の義太夫、手妻、輕口の足藏まで、類を以て集りし程に、

寺内人ならざる所なし、猶村々よりの金錢米醫油炭の寄進ものをはじめ、内陣の佛具類水引打敷（みずひきうちしき）銅燈籠まで、おもひくの奉納もの夥しく（おびただしく）、江戸よりも信仰の面々、或は地蔵尊の奉公人たる年限中の男女の兒輩（じはい）の奉納もの等若干にして算（かぞ）ふべからず、頓て（やがて）玄關へ案内しければ住職の僧出迎ひ座敷へ請じ、取持る同行もろとも取はやして、馳走の席も設けありし由なれども、船中の飲食におのく満腹なれば再三辭退し、先開帳の本尊を側近く禮拝し、什寶（じゅうほう）ばは勿論境内は隈々まで逍遥し、門外の池水の魚は若干なれど、生まれながらに片目のみに殖る（うまわる）となん、

四拾八　越ヶ谷鹽吉が振舞両度の逍遥・②

然るに越谷の驛西裏手大林の川すじの螢は至て大きく、殊更澤山なる事目を驚せり、出盛る時にいたりては毎夜く**數萬億の螢**は幾所となく、大さ鞠ほどに一堅まりとなり、須臾（しゅゆ）に水上に落て散亂す、ほたる合戦と賞して好事の人はよなく見物に罷る（まかる）よし、越谷界隈の人に聞合するにみな大同小異にして虚談ならず、是むかし有徳尊君**宇治の螢**を放させ賜ふもの也と、豫て（かねて）聞居しが、一度は見たきものと伊能小原の両輩を誘引、

（中略）

大林の川端にいたるに凡五町あるべし、兼て見物の場所用意やしけん、川の軒曲りの川添に長き床几一脚を直し、程よき樹の枝に丸き大提燈を釣下置たり、斯て（かくて）床几に圓坐を配り吉兵衛われらと三人樂座して、水上を見渡し納涼するに、両岸の叢より四ッ五ッづゝ螢火の出るよと見えしが、その間前後三四町ばかり須臾（しゅゆ）の間に**數萬のほたる**となり、爰に（ここに）彼所にあそぶ風情面白ふして、如何ともいひがたし、

（注）①俳諧を詠む時の季語で初夏を表す語の1つに「蛍」がありますが、宇治に古くから伝わる民話の1つに「蛍合戦」という逸話が残されています。
実際、「蛍合戦」とは交尾のために多くの蛍が入り乱れて飛ぶ事を指すのですが、

四拾八　越ヶ谷鹽吉が振舞両度の逍遥・③

扨（さて）又両岸より飛出し數萬のほたるは、幾所もく一緒に群り集りてあそぶ風情なれど、大さ小女が弄ぶ（もてあそぶ）手鞠ほど一堅まりと成、漸く（ようやく）水上をはなるゝ事二尺ばかり、暫く（しばらく）螢火は丸くなると見るうちに、吹来る川風に散亂し又は落て水上に散亂するあり、或は手鞠ほどに堅まりし蛍は、水上に落て三ッ四ッに分れて流るゝあり、此川筋前後三町程の間此の如しとなん、宇治のほたる合戦は見ざれども、此川はゞの抜群廣くして蛍の夥しき（おびただしき）事ならんと推量し、又筑紫のしらぬ火も爭か（いかでか）是に勝らんと思ひ、悠々然として蛍火になぐさみ夜景を愛す、凡酉の初刻（17時）より戌の刻（19時～21時）過るまで飲宴しあそびしが、夜陰の川風涼しく寒きが如く手足の涼やかなりしを覺ふ、

（中略）

此夜の流蛍の面白しろさ武蔵の名品と賞すべし、好事の雅人見ずんばあるべからず、これ予が遊歴雑記全部五編十五冊著作するの淵源（えんげん）なるもの也、

四拾八　越ヶ谷鹽吉が振舞両度の逍遥・④

翌れば六月十一日天気快晴なれば、大さがみの不動より二十五里村（ついへいじ村）の桃林川添の風景に逍遥せんと朝餉（あさげ）過るや、大さがみの行程を聞に二十六町と答ふ、但し路案内かたぐ供一人進じまいらせんとありかど、供人は却て（かえって）気兼ありて窮屈なりこゝろまゝに歩行たしと、路々の村名をしるし辰の下刻（9時）出宅し、恙なく（つつがなく）大さがみの大聖寺へ参詣し境を見めぐるに、先年妙榮尼を具して来し頃よりは、所々再建成就し悉く（ことごとく）立派に成ぬ、これ大山の不動尊の根本とかや、故に土地を大相模村といひ、大聖寺不動院と號すとなん、斯て（かくて）門外の茶店に憩ひて二十五里村（ついへいじ村）の行程を尋ぬれば十二町ありと答ふ、これによって両人とも片影（へんえい）を忍びく、くだしき耕地を過て二十五里村（ついへいじ村）にいたる、此廿五里といふ土地は方量一里餘の間桃樹のみを植込て、居村も屋敷も耕地は勿論目のおよぶ所桃木のみにして餘木少なし、江戸傳馬町例年天王まつりに諸方に先達て桃をひさぐ物は、みな此土地より出せり、赤く色付たる桃をば、世儘草むかしと呼び苅草の中に一両日深くつゝみ、蒸て色付せる様にいへども左にあらず、五月下旬土地の男女一同樹に階子を懸け、高き樹には足代して明細に葉を取捨て、天日に曝して赤くす、中々人手のかゝりて梅の實とは大に違えり、葉を取捨て桃の色付には花よりも美しく、見渡す風色一段なりとぞ、

四拾八　越ヶ谷鹽吉が振舞両度の逍遥・⑤

予その時節来合せて見ざれば是非を論ぜずされど、土地の茶店にてひさぐ物も鎧通しの類にや、見事にして價（あたい）こゝろ安し、扨（さて）此二十五里は戸根の川添にて船着なれば、川端の家々必主と建ならび旅籠屋する家もありて、取分川添の風色おもしろく、頓て（やがて）涼しげなる酒店に憩ひ、小原は正気散壹合に元気を引たて、元来し畷路（なわてみち）にさしかゝりしが、時すでに午の刻（12時～13時）に近からんとす、

直に越谷の驛に歸らんも面白からず、往返一里のまはり路といへど、これよりまくりる立場へ出、聞およぶ鰻魚に晝餉（ひるげ）したゝめんと、くだく敷閑道（かんどう）凡壹里餘を過、名にしおふまくりの立場へ出けり、則ち小綺麗の埴生（はにゅう）の食店に憩ひ、鰻魚を燒せ食し見るに、東都に比ぶれば一段貧し、彼印旛沼の傍なる中村の鰻に少しは勝らんか、炎天の暑さ焚が如く堪がたければ、座敷の片隅にしばし腎を枕にせんと思えど、蠅（はえ）多くして忍ばれねど、片時もはやく油屋が宅へ越て一睡せばやと、是より二十餘町日盛の驛路を扶け合（たすけあい）つゝ吉兵衛方へ立戻りぬれば、

◎江戸時代の時刻

（出典）　大江戸絵巻
江戸時代の時刻・時間